

過疎村における老人の意識と生活

——京都府宮津市世屋村上世屋の場合——

山 口 信 治

は じ め に

日本経済の高度成長期と目される昭和30年、とりわけ35年以降において太平洋ベルト地帯では急激な都市化が進行した。またそれとは反対に開発の進まない農村部では村をあげての離村が続き、勢いのおもむくところ多くの廃村を見るに至ったケースが少なくなかった。むしろ経済の極端な歪みはもはや放置できないところまでできてしまったことは多くの認めるところである。さしずめ社会学における過疎、挙家離村、廃村の指標は「人口減少の終局点、であり、負の条件、ネガティブな変化過程をさぐる意味はおおきいと思う。

国土庁の発表した『過疎対策の現状』(昭和60年版・61年度*)によると、過疎地域市町村は神奈川県と大阪府を除く45都道府県に及びその全市町村総数に占める過疎地域市町村の割合は35.4パーセントにも達しているという。面積にして凡そ国土の45.8パーセント、さらにここには今尚6.7パーセントの人口がいることが報告された。

そこで今回はこの中から京都府宮津市にある1過疎村を研究の対象に絞ってそこにどんな人びと(年齢、性別、階層、階級など)さしずめ一般に取り残された老人といわれる人々の生活や意識をつぶさに探ってみようとするのが第1のねらいである。さらに第2のねらいは仮に過疎村を老若のバランスを欠いた社会と考えるならば生活者たちがどう自立自助しているのか、これも知りたい事柄である。第3はその生活が比較的他の人との協調なしに可能な場合とどうしても接触を濃厚に保たねばならない場合とがある。そのときどんな接触の仕方をしているのだろうか興味ある事柄でもある。それにもう1つ研究者のなかにあったのは「村の起源」に

ついてはなに1つ持ち合わせていないわれわれは高度成長以来こうした過疎、換言すれば村の危機やそれに伴って生じた崩壊などを真のあたりに見ることができるのである。そこで村の解体あるいは崩壊のプロセスについても科学する必要を感じた。しかも社会学から過疎研究ということになればどうしてもそこに関与するさまざまな人と人の折衝や交渉さらには対立、葛藤など、その意識など研究しておきたいところであろう。以上いくつかの過疎村へのアプローチをふまえ調査研究の目的について触れてみた。ただし1つ気掛かりなことは過疎には確かに老人が多い(3,40パーセント)、だからといって人口の高齢化を意味する高齢化社会と見るかであるが、これまで内外の学会でもおおいに議論しているところであっていまだ整理されていない。したがってまた過疎と高齢化社会の指標となっている人口の高齢化とを混線しない区別が可能ならばそれも含めて研究のねらいの中に含めておきたい。

なおこの研究は昭和60年度、61年度山口ゼミ(老後老人問題研究班)の学生らが中心になって現地にて調査研究したものであり、その結果を踏まえて報告するものである。このため佛教大学社会学研究所から援助をうけたことを記しておく。

「61年度過疎白書—過疎対策現状」

(国土庁、昭和62年3月)

1. 昭和55年10～60年10月の5年間の過疎地域の人口減少率は3.1パーセントにとどまり、総体的に人口減少に歯止めがかかった。ただし、逆に人口の増加をきたした自治体が200団体になる。
2. 65歳以上の人口(高齢者)の占める割合は60年で17パーセントとなる。全国レベルで17年先行した高齢化社会となっている。

3. 人口の自然減によるコミュニティの崩壊の危険性あり、おそからずその可能性が出てきた。
4. 地域別では中国地方（20.3）の最高、続いて近畿地区（19.9）、四国地区（18.8）パーセント。
5. 「過疎地域」（過去15年間の人口減小率が20パーセント以上の地域）
1,158団体（35年、740町、383村）
国土面積の46パーセント。
前人口の6.7パーセント。
平方キロ当たりの人口密度47人（全国平均320人の

- 7分の1）
6. 人口減少率、昭和40年代10パーセント台、以降低下の一途をたどる。
7. 人口構成では昭和35年から60年の間に14歳以下の若年層の占める割合36から19パーセントに低下、他方65歳以上の高齢者のそれは7から17パーセントに激増した。その率は（全国10パーセント）より高い（厚生省の推計では17歳の全国の高齢化社会の姿のさきどりした数値とした。
（『よみうり新聞』発表 62.05.01）

I. 世屋地区の概況

1) 地理的概況（地域の自然）

この地区は北緯 $35^{\circ}41' \sim 43'$ 度、東経 $135^{\circ}12' \sim 15'$ 度に位置した京都府北部の丹後半島の東南にあたる世屋高原一帯に点在する5つの集落から出来ている。（第1図参照）宮津市の中心から北へ2.5キロ山間部に入った所にあり。面積26.64平方キロメートル、東西約7キロ、南北約13キロの広がりを持った細長い地域である。じつに総面積の96パーセントが山林原野で取り囲まれている。したがって僅かに開いた所を開拓して集落や耕地にあてている。

2) 地 形

丹後半島は若狭湾の西に位置し、南西から北東にほぼ長方形をなしてのびる半島である。東の基部は宮津湾と天ノ橋立の砂地に閉ざされた阿蘇海、西のそれは久美浜湾をもった地塊から出来ている。南は岩滝、野田川から与謝峠をへて出石に達する地溝を境に大江山塊に直面している。さらに西は円山川に沿った断層で仕切られている。後に述べる挙家離村や廃村はこの丹後半島の東側を主にまた西側では山間部に若干見られる。

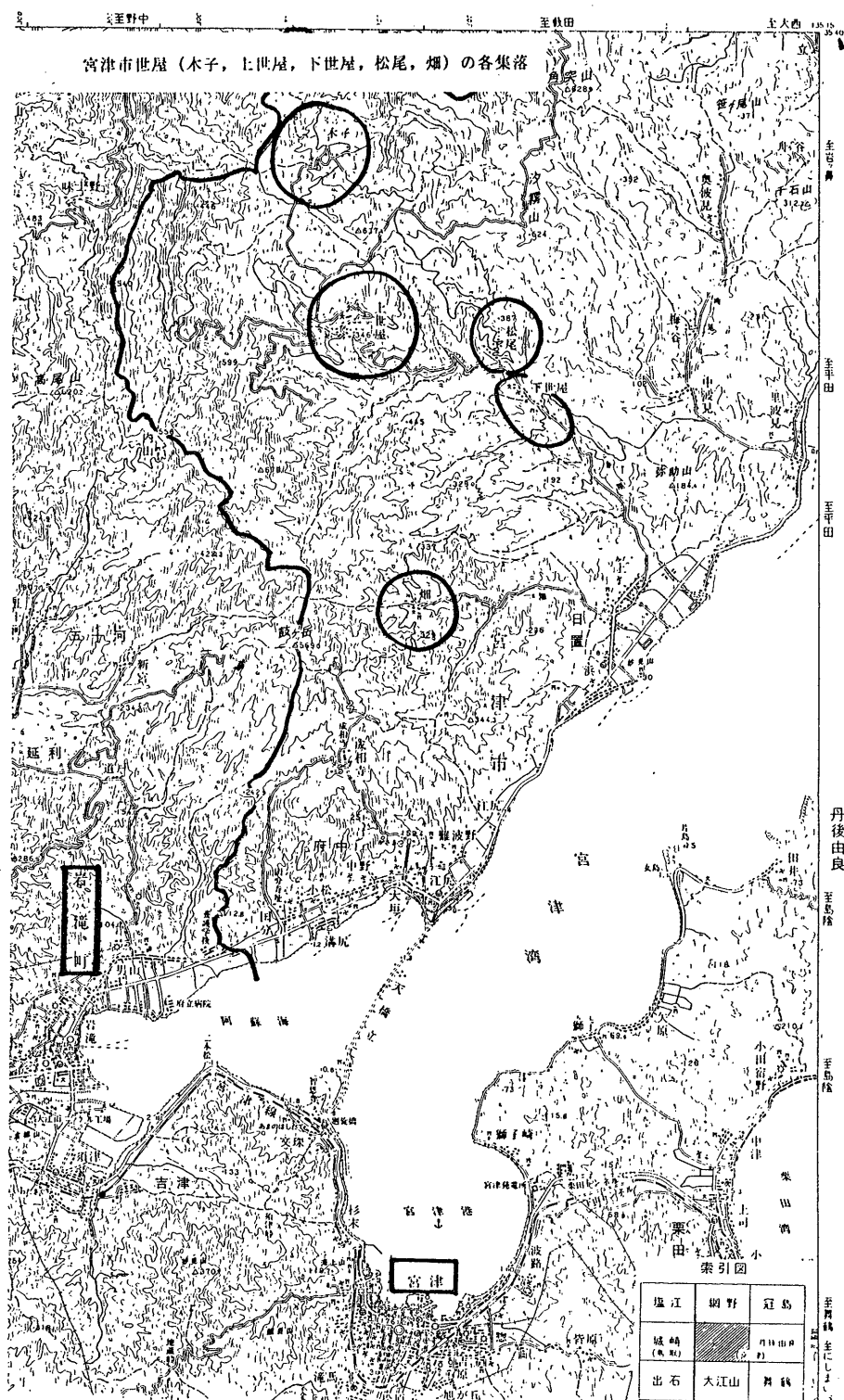
半島の地質はその基部に花こう岩が広く露出し、これを貫くように半島先端に第3紀末葉に流れ出た安山岩や流紋岩がある。花こう岩は広く河谷平野を形成しており比較的米作に適している。しかし、堅固な火山岩は山峰を形成しこれを削った谷は狭く急流をなしている。なお半島の沖積平野は狭小な盆地性の河谷平野に限ら

れている。村内を成相山脈が南端より2つに分かれて西北に走り、その南には鼓が岳（569メートル）、ほぼ中央に2山汐霧山（624）と（角突山（629）に挟まれている。いずれも620メートル以上の高山が連がり、この山間部に源をもつ主なる河川に世屋川と畑川がある。さらにこれに注ぐ木子川、駒倉川、世屋川（上地川、桂川、小松尾川）、松尾川と、いずれも深い谷底を流れる河川は川はばが狭く流れが急なためその両岸は侵食された岩膚をみせまことに溪谷美を作りだしている。

ほぼ直線的に宮津湾に注ぐ世屋川とその支流宇川に沿って各集落が点在しているが、その最も奥まった集落が木子（きご）ですすでに海拔500メートルの標高をもつ高原である。続いて上世屋（かみせや）が海拔360メートル、松尾（まつお）280、畑（はた）220、下って下世屋（しもせや）これが140メートルに位置している。このような村落は世屋川の溪流に沿った比較的なだらかな傾斜を立地条件とした所に集落を集めている。

続いてこの気象条件も見ておこうと思うが、年間2,000～2,600ミリという降水量からわかるように大変雨の多い地域である。これは日本海特有の裏日本型気候に属したもので秋冬期の10月以降は連日のように「ウラニシ」とよぶ降雨驟雨性がある。なお12月の下旬から3月にかけて雪がふり最大2ないし3メートルの積雪がある。時としてこの大雪は住民に不安を与えおおくの離村者を出す原因の1つにもなっている。たとえば昭和38年襲った奥丹後一帯の豪雪（上世屋では4メートルを越す積雪を記録した）

第2-2図 各集落○○○



のごときものが記憶に新しい豪雪である。豪雪もさることながらここ世屋は「雪暮れの里」の異名もある如く、冬季1か月以上にわたり根雪が続くところから付いた名であろう。余談になるがこの地名「せや」は世屋の二字をあてているが山の背が屋根のように連がっているところから付いた名前だともいわれている。

したがって山地の植生態は温帯林的林相を呈し、シデナラ、ブナ、ケヤキ、トチ、クヌギ、クリなどの喬木性の落葉広葉樹が多い。

3) 沿革（村落分布）

近世以前における丹後半島の集落分布についての資料が少ない。たとえば和名類（平安初期）には20戸が見られる。中世では『丹後国御壇家帳』に断片的にしか分からないが各集落ごとの耕地面積と戸数が記されている。さらに半島全域を網羅するものでは江戸時代の『丹歌府誌』がある、但し残念ながら戸数や耕地規模については全然触れていない。ようやく近代史料に木子集落について『氏子狩帳奥書』がある。なお明治5～10年ころの戸籍簿より算出した坂口慶治の論文¹⁾によると268集落を数えている。

本村（世屋）は昔、余社郡日置郷に属し正暦時代より「世屋保」の名称を持っていた。それによると当時下世屋村、上世屋、東野、木子、松尾、駒倉の6村をもって1村としていたことが分かる。ところが慶長年間にはそれぞれ分けて独立した6ヶ村としていた。いずれにしても世屋保の縁起から今日の村名を取ったと伝えられている。各村落とも維新前（養老3年）は従四位 松平伯耆守 藤原宗秀の領地であった。なお維新以後は明治4年大名とも廃藩置県制により宮津県に属した。途中同年11月豊岡県にさらに明治9年には京都府に合併される。また明治17年には日置村と合併明治22年4月には例の自治制施行により日置と分離してさらに畑村をくわえて下世屋村、松尾村、東野村、木子村、駒倉村、上世屋村の7ヶ村合併して世屋村と称し役場を下世屋（字下世屋1,573番地）に置いた。戦後の市制（昭和29年）によって現在の宮津市に合併した。

4) 歴史—社会的概況

ではいつごろ誰がどのようにしてここに住まいはじめたのだろうか。残されている古文書などから推測する以外に知る由はないが、地域の歴史的社会的概況について、村民に伝わる神話や伝承（臨済宗派滋源寺に伝わる巻きもの時代著者不明）からその一端を述べておく。

ここに人々が住むようになって久しいが、言い伝えによると成相観音（真応上人；慶雲元年＝西暦704年）の発祥とともに古い。

波の音 松の響きもなりあいの
風吹きわたす天橋立
西国28番 世屋山成相寺

と老婆たちによって歌われる御詠歌の哀調と慈悲のこもったメロデーが表徴しているように、ただ有り難いもったいないと拝唱するだけでそのまま幸福であると信仰心あつき住人の特徴をつかむことができよう。それまではその下の下世屋にはすこしばかりの人々が住んでいたらしいが、然し真応上人の聖地発見以来この地域にひとが集まり誰れ言うともなしに上狭屋（かみせや）と呼ぶようになったという。さらに成相観音がひろく知れるにおよびさらにこの奥の松尾、木子、駒倉などに開発の手が伸び人々が住むようになったという。

集落の立地条件

それでは明治初期の集落分布について述べるが、その立地条件の特徴をみると海拔100メートル以上に100集落が存在していた。しかもその高距限界は500メートルである。しかも280～320メートルの間には集落が少ない。これはこの高度に安山岩が露出した狭谷地形のためである。（図3-1参照）

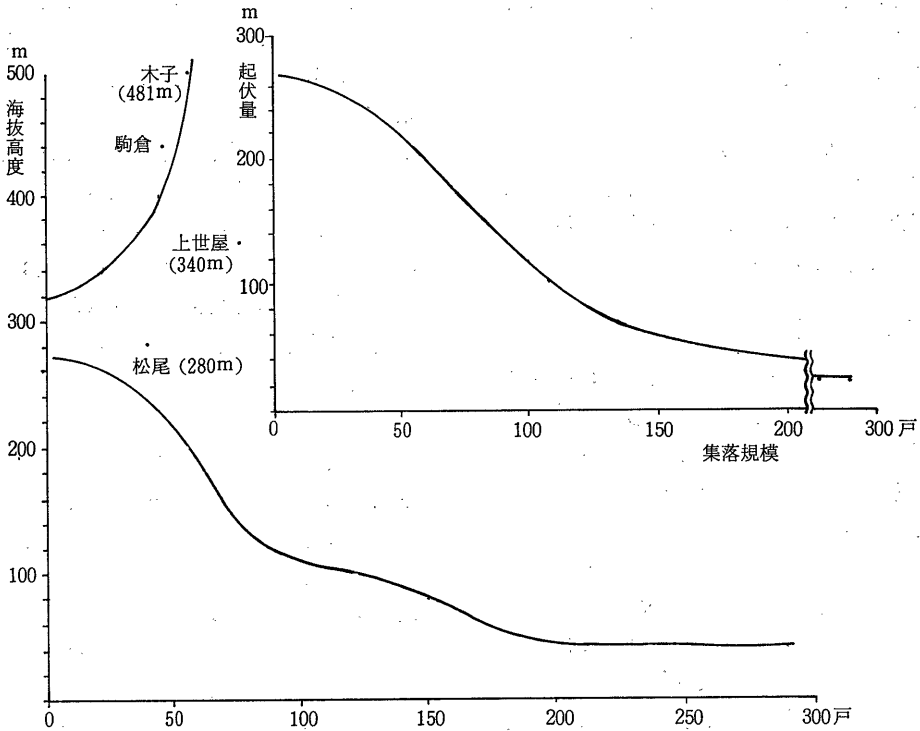
こうした集落の立地条件からその特徴を描きだしてみると自給経済の支配的な明治初期の半島においては高度や気候の集落発達にたいする規制力は比較的小さく、むしろ地質や地形が重要な条件となっていたつまり可耕適地の多少が大きく関係していたといえよう。

それでは続いて今われわれが問題にしている集落規模の縮小についてもうすこし見ておきたいものがある。それは集落縮小の傾向であるが、

第3-1図(上) 明治初期の高度別集落の規模

(下) 明治初期の起伏量別集落規模

(水平距離 700mに対する最大比高)



半島の集落規模を明治初期と昭和40年で比較してみると海拔100メートル以上の100集落のうち86集落が縮小している。(うち8集落変化無し, 6集落は増化をみせている) しかも50パーセント以上の縮小をみたのは32集落, また海拔40メートル以下の底地集落でも60パーセント以上の縮小をみたのは32集落, また海拔40メートル以下の底地集落でも60パーセントもの縮小をしており半島全体が人口減退の終局点のネガテープをあらわしていることが分かる。しかも集落規模の縮小と海拔高度との間には正の相関がみられる。図3-2を参照, まさに木子, 駒倉, 上世屋, 畑, 松尾など世屋村の大部分がⅡ期のタイプに属している。(第3-2図参照), いずれにしても海拔高度が集落立地の重要な影響力を持っている。と同時に縮小過程にもこの海拔高度がインパクトをあたえていることは否定出来ない。

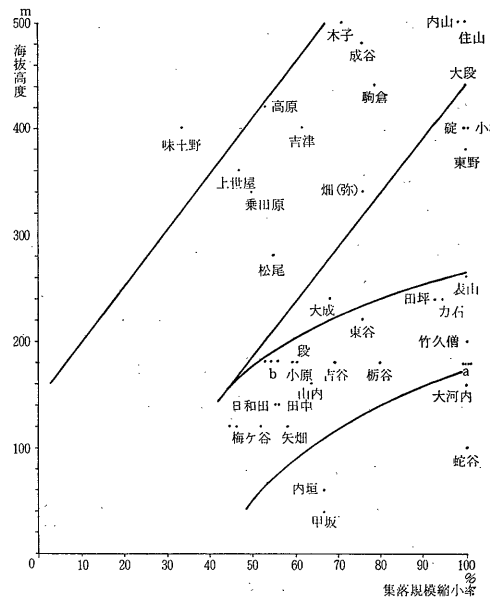
それでは何時ごろ集落縮小や廃村化過程が起きたのか次ぎにみておこうと思う。

縮小化の時期

さきの坂口論文によると世帯減少率50パーセ

第3-2図 縮小集落の高度別縮小率

(明治初期と昭和40年の比較)



ント以上の集落(40個)から挙家離村の時代別地域別移動を表にまとめたのでそれを参考にすると, 世帯を時代別にみると, 明治19年以前で

は欠落世帯は行方不明、死亡絶廃家でこれを廃絶世帯とよびその後も明治29年まで多く見られた減少であった。ただしその大部分が従来他家の付籍のためほとんど一家をなしえなかったもので村に与えた影響はさして多くはなかった。その後廃絶世帯は大正3～10年の世界第一次大戦時と昭和35～40年の高度経済成長期に多くなった。なかでも丹後地域内の町を指向する移動が世屋地区の特徴である。

II. 対象地上世屋・木子と村の変遷

1) 対象地区（上世屋、木子地区）

本世屋地区は昭和29年6月市制が施行されたがそれ以前は旧与謝郡世屋村である。当時現在の木子、上世屋、松尾、下世屋、それに畑の5地域に現在廃村してしまっているが東野（昭和39年全村廃村）及び駒倉（昭和47年完全廃村）の2集落をふくめた7字からなっていた。

1; 2) でみたように世屋川を挟んで比較的なだらかな場所を選んで集落をつくっているが、一般には地形は険しく複雑で急な斜面が多いため村の立地条件としては恵まれたものではない。とくに現存する松尾のごときは堅い岩盤のうえにできた薄い地層からできており、しかも傾斜が2.30度という急勾配ひとを寄せてけとしない世屋川の溪谷にそそり立った字もある。ここに僅かに開かれた土地に人々がしがみつくように水田を耕し稲作をまた畠地では野菜やそばなど雑穀作を、それに牧畜や林業を主とした生活が行われている。

海岸通り（府道）から世屋地区に入る唯一の幹線道路（浜丹後線）が日置（ひおき）から世屋高原にいたる道が通じている。道幅も狭く、かつ急な坂道をいくつも溪谷を右に左にまきさらには急カーブの多いので交通の難所となっている。そのため自転車などでは到底用事がたせず自動車が必要である。1日4往復世屋高原（家族村）行きのバス（丹後海陸交通KK）が運行しているため全面アスファルトで舗装されている。しかし普段でも降雨量が多いため、タイヤのスリップ事故が多く発生する危険な道路である。

また廃村化の時期であるが大きく2期に分けられる。1つは昭和の初期から7、8年までの廃村で昭和恐慌と丹後地震を背景として起こったものであり、2つは昭和27～28年にかけての高度経済成長期の兆しから31年から40年までの凡そ10年間の完全廃村である。したがってここに取り上げる世屋村の縮小、廃村化過程は第2期廃村にカテゴライズされた時期の廃村にはいる。

また冬季とくに積雪の多い時など路線バスも年間平均10日間以上の不通が続き交通路が完全に閉ざされてしまい、しばしば奥くの木子、上世屋地区は陸の孤島と化してしまうことがある。したがって自動車のほかにスノーモビル（雪上車）をもつ者も少ない。

亦、過去の歴史の中には豪雪の害ばかりではなく風水害や土砂くずれ、雪崩の危険などといった災害が相続いてきた。その内未だ村民の脳裏から消え去らない記憶は大火である。ただ、先程も述べたが地形（岩盤）が強いため地震による被害は比較的少ない。現存する村の中で過疎化の著しい松尾は地滑りやなだれによる大惨事は日人々の不安をつのらせ繰り返される災害が村人の不安をかきたてたのは事実である。したがって今尚村に残る住民の中にはそうした被害や災害に見舞われたものが少なくない。

はっきりとした資料がないので人口の推移を推し量ることができないが、大正13年ごろのデーターによると60世帯、290人を擁する中規模の集落であった。然し我が国の高度経済成長のあおりをうけて次第に村の人口縮小をきたし廃村も時間の問題になってきているといわれる。現在それでも20世帯、45人が細々と村をささえている次々に起きた自然の驚異と労働条件の劣悪が若い労働人口を流出させ、それにともなうて地区の児童数も減りかつての活気も今ではすっかりいろあせ昭和51年度日置中学校の卒業を最後に廃校になり、続いて世屋小学校上世屋分校も廃校にいたってしまった。もとより地区のコミュニティセンターの役割をはたしてきた寺

第 1 表 丹後半島の廃村一覧表

廃村化の時期		第 I 期				
集 落 名		枳 谷	車 谷 奥	内 山	大 河 内	牧
現在所属行政域 明治初期の集落規模(世帯数) 昭和40年7月の世帯数 部分廃村化の年次 全面宅地廃村化の年次		丹後町是安 5 1 明治年間 昭和初年頃	大宮町上常吉 3? 0(昭28) — 昭和初年頃	大宮町五十河 16 1 昭和3年 昭和7年	大宮町上常吉 4 0(昭18頃) 昭和初期 同上	宮津市日ヶ谷 10 0(昭31) 昭和30年 昭和31年
廃村化の直接的契機 廃村化離村の動機 廃村の形態		? 生活破綻 一部荒地荒廃を伴う	? 生活便益 全面宅地廃村(通い耕作)	丹後大地震 生活便益 左に同じ	丹後大地震 生活便益 左に同じ	昭和30年大火 生活便益 左に同じ
移住に関する特徴	移動距離	中距離	近距離	近距離	近距離	近距離
	移動方向	平地大農村、分散型	谷口部、転移型	麓の母集落、転位型	左に同じ	左に同じ
	離村形態	供別的縁故離村	左に同じ	左に同じ	左に同じ	左に同じ
	移住後の生業形態	転業・小作兼業	就農・通い耕作専業	左に同じ	左に同じ	左に同じ(通勤副業も始まる)
立地条件	交通機関(昭和40年)	峰山よりバス1日18往復、停より4km、内1.5kmは徒歩のみ	大宮よりバス1日19往復、停より2km	峰山よりバス1日4往復、停より5km、内3.5kmは徒歩のみ	大宮よりバス1日19往復、停より徒歩1.5km	宮津よりバス1日2往復、停より2km徒歩又は耕運機
	地形位置	谷 頭	谷 頭	高原～谷頂	谷 頭	谷 頭
	地 質	新第三紀礫岩	花 崗 岩	新第三紀砂泥岩	花 崗 岩	新第三紀砂泥岩
	海 拔 高 度(m)	180	180	500	160	180

廃村化の時期		第 II 期				
集 落 名		尾 坂	山 坪	大 谷	力 石	住 山
現在所属行政域 明治初期の集落規模(世帯数) 昭和40年7月の世帯数 部分廃村化の年次 全面宅地廃村化の年次		網野町島津 12(大正初期) 0(昭39) 昭和33年 昭和39年	伊根町野村 14 1 昭和38年 昭和40年	大宮町河辺 11 0(昭40) 昭和39年 昭和40年	丹後町豊栄 31 2 昭和34年 昭和40年	弥栄町野間 17 0(昭40) 昭和35年 昭和40年
廃村化の直接的契機 廃村化離村の動機 廃村の形態		34年伊勢湾台風 38年豪雪 左に同じ 一部通い耕作、耕地荒廃が多い	38年火災 左に同じ 左に同じ	な し 左に同じ 全面宅地廃村、大部分耕地荒廃	34年大災 左に同じ 一部通い耕作、耕地荒廃が多い	38年豪雪・長雨 左に同じ 完全に廃村
移住に関する特徴	移動距離	近・中距離	中距離	近距離	近・中距離	中距離
	移動方向	地方中心町・平地農村、分散型	平地大農村、分散型	麓の母集落、転移型	麓の隣接集落・地方中心町、転位・分散型	平地大農村、転位・分散型
	離村形態	左に同じ	雪崩的同調離村	左に同じ	個別的縁故離村	協議・集団離村、公共機関斡旋
	移住後の生業形態	農業転向	機業又は織工と小自作兼業	転業・小作兼業	機業転向・小自作兼業	工具・織工、小作兼業
立地条件	交通機関(昭和40年)	網野よりバス1日10往復、停より4km	宮津よりバス1日2往復、停より3km	峰山よりバス1日4往復、停より6km	峰山よりバス1日18往復、停より7.5km	峰山よりバス1日3往復、停より6km、内4kmは徒歩のみ
	地形位置	谷 頂	谷 頭	谷 頭	谷 頂	谷 頂
	地 質	流紋岩・新第三紀砂礫岩	安 山 岩	花 崗 岩	安 山 岩	新第三紀砂泥岩
	海 拔 高 度(m)	180	240	180	240	500

第 II 期 (全面宅地廃村)

表 山	碓 開 拓 村	蛇 谷	西 谷	小 杉	大 段
弥栄町吉沢 10 0 (昭33) 昭和27年 昭和33年	丹後町乗田原 10 (昭23入植) 1 昭和27年 昭和34年	宮津市男山 10 0 (昭36) 昭和32年 昭和36年	宮津市成相寺 10 0 (昭38) 昭和27年 昭和38年	弥栄町野間 9 0 (昭38) 昭和33年 昭和38年	伊根町野村 3 0 (昭39) 昭和27年 昭和39年
な し 生活便益転業 出作小屋化、一部 耕地荒廃	な し 生活破綻 出作小屋化、大部 分耕地荒廃	な し 兼業機会獲得 全面宅地廃村 (通 い耕作)	な し 左に同じ 左に同じ	38年豪雪 生活便益 完全廃村	38年豪雪 生活便益・転業 完全廃村
近・中距離 隣接集落・地方中 心町、分散型 左に同じ 通い耕作専業と機 業転向	近・中・遠距離 母集落・地方中心 町・大都市、分散 型 左に同じ 転業、一部通い耕 作が残る	近 距 離 麓の隣接集落転位 型 左に同じ 通い耕作と家族員 の通勤兼業	近 距 離 左に同じ 左に同じ 左に同じ	中 距 離 地方中心町・平地 農村、分散型 雪崩の同調離村 織工・小作兼業	近・中距離 母集落・隣接集落 ・地方中心町、分 散型 個別的縁故離村 機業転向
網野よりバス1日 3往復、停より4 km、内1 kmは徒歩 のみ 谷 頂 凝灰岩及火山滓 260	峰山よりバス1日 11往復、停より7 km、内4 kmは徒歩 のみ 谷頂～高原 安 山 岩 400	岩滝口よりバス1 日9往復、停より 4 km 谷 頭 花 崗 岩 100	岩滝口よりバス1 日9往復、停より3 km 谷 頭 花 崗 岩 180	峰山よりバス1日 3往復、停より5 km、内1 kmは徒歩 のみ 谷 頂 凝灰角礫岩 400	宮津よりバス1日 2往復、停より4.5 km、内1.5 kmは徒 歩のみ 谷頂～高原 安 山 岩 440

第 Ⅲ 期				世 屋 地 区	第 Ⅱ 期 (一部宅地廃村)	
竹 久 僧	成 谷	日 和 田	大 成		東 野	駒 倉
丹後町宇川 10 0 (昭40) 昭和38年 昭和40年	宮津市日ヶ谷 17 4 昭和38年 —	網野町木津 34 5 昭和37年 —	峰山町鯨留 28 9 昭和32年 —		宮津市世屋 6～8 0 (昭39) 昭和38年 昭和39年	宮津市世屋 46 6 昭和36年 昭和47年
38年豪雪 左に同じ 全面宅地廃村，耕 地荒廃が多い	38年豪雪 左に同じ 一部荒地荒廃	40年春一家心中 左に同じ (通勤条件改善) 一部荒地荒廃	な し 左に同じ 一部耕地荒廃		38年豪雪・長雨 左に同じ 完全廃村	38年豪雪 生活便益・転業 耕地荒廃が多い
中 距 離 平地農村・谷中集 落，分散型 協議離村 織工・小作兼業， 杜氏	中 距 離 平地大農村・地方 中心町，転位・分 散型 同調離村 転 業	近・中距離 左に同じ 個別的縁故離村 織工・小作兼業	近・中距離 左に同じ 個別的縁故離村 左に同じ		中・遠距離 地方中心町，転位 ・分散型 雲崩的調離村 工員・織工（家族 総就労）	中 距 離 左に同じ 協議・同調離村 左に同じ
峰山よりバス1日 11往復，停より8 km，内1 kmは徒歩 のみ 谷 頂 安 山 岩 200	宮津よりバス1日 2往復，停より徒 歩5 km 谷頂～高原 安 山 岩 480	国鉄木津駅より4 km 谷 頭 新第三紀砂泥岩 140	峰山よりバス1日 5往復，停より3 km 谷 頭 花 崗 岩 240		宮津よりバス1日 2往復，停より徒 歩3 km 高原～谷頂 新第三紀砂泥岩 380	宮津よりバス1日 2往復，停より徒 歩4.3 km 高原～谷頂 新第三紀砂泥岩 440

(臨濟宗慈源寺)も昭和29年から無住の寺と化してしまい、これまで村人を繋いできた結合意識がうすらいだことは否めない。

かつての同地区の家族調査からその家族構成をしらべてみると、どの家族にも2人か3人の子があった。今ではその多くを市内や京都市、さらには京阪神方面にむしろ親の願いで就職、就学、結婚などを理由により他出させてしまったため、現在村にのこる若者は僅かに3人になってしまっている。その内訳は農協職員1名、宮津微生物科学研究所研究員1名、それに自営農業従事者(年表による農業後継者はこの1名)1名である。このように多くの若者を出してしまったため農山林業の担い手を失い山林経営や農業をあきらめた農家が多く後継者や望みのないまま山林田畑を荒れほうだいまかせているのが現状である。さらにそうした農業ばなれに拍車をかけたのが過疎対策の一貫として村にもとらされた営林署の山林労働の委託である。これは昭和43年ごろ上世屋に委託された事業である。その山仕事の条件は1日8時間労働、日給月給で1日1,500円から1,800円、年2回のボーナスさらに雨天休として6割りが支給、その上、12月から翌年の3月までは失業保険支払われる。春秋2回の健康診断、60才定年制などを備えた好条件の現金収入の道が開かれた。もっともこれは村の男性に限ったものである。さらに遅れること6年(昭和49年5月)女性の働き口として営林署に出る主婦を対象に西陣織りの講習会が行われ西陣帯(夏帯)の手機が導入されおおくの主婦たちがこれに従事して現金収入の道を得るようになった。

ところでこうした現金収入の仕事につくことによって村人さしずめ婦人たちの意識におおきな変化をきたした。「現金を持つようになった」という(独立の財布を持つ)の実感は大い。その上、なによりも、個としての意識に目覚めたことであろうか。これまでの重労働を強いられる収作業に対して農業外労働(軽作業)でしかも入になる仕事への選択や移動である。しかもこれならば仕事の合間をみて畑のしごと年寄りたちと共にできるし、一挙兩得、むしろ加えて余暇時間を作り積極的に生かす婦人の社会参

加に寄与できるのではないか、さらには過疎をくいとめるための地域の活性化に役立てようとするものであった。いわずもがなであるがこうした手機は年齢に制限が無いことであろう。後程のべるが夫との死別後安定した生活ができるのはなによりも家のなかで好きな時間にできる手仕事のためであろう。なお当時営林署へは14人が、またおおよそ20戸あまりの主婦たちが手機をいれた。

したがってこれまでの1農家当たりの平均1町5反ほどの田で米作を続けてきたが国の減反政策ともあいまって一層の農業ばなれに拍車をかけることになったのである。

現在、男性の営林署の定期の山林労働に従事するものは6名、なお1名は営林署職員に1名任命され毎年雇用更新して山仕事に従事している。収入は平均年300万程度ある。

一方婦人たちに機会が与えられた手機従事者は9名。彼女たちの織る西陣帯はもっぱら名古屋8寸帯、袋帯、ろ袋帯のいわゆる夏帯が主である。いずれにしてもこれらの西陣帯は高い技術を要するものであるが、現在名古屋8寸帯が6名、袋帯、ろ袋帯2名で、手はたの工賃は名古屋帯で月15万円から16万円、袋帯では12から13万円となっている。その労働時間は凡そ1日平均10時間となっている。

またこのほかこの地独特の織物、ふじぬの(藤布織り)がある。かつておおくの女性たちが藤布織りを習得していたが現在ではまったく廃れてしまって、わずかに1名が残り過疎対策の村起こしに役立とうとしている。戦後藤布に代わる繊維の登場で一時廃れてしまっていたが10年前上世屋の無形文化財の指定をうけ一役をになっているのである。

たしかに主婦にとって、いや家にとって現金収入は歓迎されるが多面新たな問題もでてきている。その1つは主婦の多忙さと手織に時間がとられるため家族の話し合いの時間がとれないことであろうか、家族成員間の人間的連帯感をうすめつつ在るという声をきくことがある。したがって収入の面では良いがデメリットを考えて機織りをとりいれた家でも現在織っていない家が少なくないのはそのためであろう。その他

近隣意識を大きく変えつつある。おしなべて個人の価値観の多様化、個人主義がすすみ地区の連帯といった意識の後退がみられる。

とくに地区の高齢化がすすみ、地域人口の大半（42パーセント）が65才以上の老人となっている。とくに彼等の生活には想像を絶するものがあるに違いない、例えば降雨量や積雪の多い上世屋では老人世帯では屋根の雪おろしが絶対必要なのに肝腎の担い手がいらない。そこで隣家との間に新しい関係（相互扶助）が生まれ老若の要ができつつある。それにしても年老いた夫や妻を失った単身生活者のそれは危機的状況といっているものである。「だれも面倒みてくれるものがない」ともらしたり「生活ができなくなったら子供のところでもいくか」と吐き出すようにいう老人たちの嘆きは実に印象的である。まさに「人口減少の終局点」の問題である。木子地区の場合

この村は海拔481メートルの高さにある世屋一高いくらに当たる。また世屋村の一番奥に位置した村であるが、他の村に比べて比較的平坦なところである。上世屋（346）をぬけさらに汐霧山に至る丹後縦貫道路の途中を左折した広い高原その行きとまりに点在する集落である。上世屋から4キロメートル、下の日置から11キロメートル離れた村で集落付近を宇川が流れている。この村は平家の落人といわれてきたが今日それに由来したおどりや祭りが今でも残っている。

現在、この地区に8世帯、29人が住んでいる。その内6世帯25人が新しく入殖してきた人々であり、そのため村の年齢構成が若がえり学齢期の子供が増えるという世屋村では珍しい住民構成からなっている。

かつてこの木子は世帯数50戸を数えた可耕適地の豊かな山村であった。地区内には小学校があり、一時は50名に近い児童がいた。しかし世屋村を襲った経済成長の嵐と自然の猛威、それに度かさなる大火にみまわれ出稼ぎと挙家離村を続出させ村の縮小を余儀なくさせた。離村者の多くは隣町の岩滝町に補助を受けて移り今日でも尚岩滝から通いで耕作を続けている者が10人ほどいる。その1人の古老S翁は「あそこに

1軒こちらに1軒とその奥に土蔵や隠居が」といって雑草のおい茂る荒れ地を案内してくれたのが印象的であった。言われるまでもなく離村者が放置していった田畑は荒れるにまかされその荒廃がいちじるしく殺漠とした光景を人々に与えている。今回われわれがこの地になんとか訪れた時村に残った最後の砦となっていた寺（浄土真宗教念寺）の老住職と婦人が寺をたんで山をおり最後の挨拶をかわしている光景をまのあたりに見せられた。寺も宮津に買いとられ取り壊されていくのを見るにつけ一末の淋しさが胸を横ぎる。他方入殖者たちのペンション風のモダンないえ、廃屋を買取して若者向きに改造し新しい村づくりをしている新旧の対象的な家並を旧住人にどう写っているのだろうか。最近区長も入殖者から選ばれ新しい村おこしに新住民による自治が確立されつつあり自治権の一斉が移動される日も近いことであろう。

2) 昭和14年ごろの村の概況

イ) 年 表

上世屋地区の年表

明治41年	上世屋大火災（30戸近く焼失、当時60戸） 眼鏡橋から犬崩盤切崩工事が始まる
大正2年	不 作
8年	流行性感冒（インフルエンザ）流行
12年	電灯工事完了
昭和2年	学校大改築
9年	室戸台風（9月21日）被害でる
10年	風水害復旧工事
19年	上世屋大火災（9月2日）48戸焼出、当時49戸、2名焼死
24年	電話架設工事始まる
27年	丹海バス運行、上世屋車庫建設（後に廃止）
29年	丹海バス定期運行（4月1日）宮津市制施行（宮津市へ）
33年	高原キャベツ栽培始まる（後に失敗）
36年	浅谷（上世屋）火災、3戸焼失→廃村へ
38年	豪雪（2月）警察機動隊除雪救援活動（一週間） 姫路鐘紡工場へ冬期出稼ぎ（4～5名）
47年	簡易水道施設完成（地上式消火栓完成）
51年	日置中学校世屋上分校廃校

木地子地区の年表

明治27年	上世屋小、木子分校開設
34年	木子小学校独立

39年	木子小学校建築
大正7年	あげし(木子)火災
9年	流行性感冒(インフルエンザ流行, 23名死亡)
13年	電灯点灯
15年	木子大火災, 28戸焼失(当時五十数戸)
昭和16年	府道完成(木子)
22年	電話開通
29年	宮津市制施行(6月1日)上世屋までバス開通
34年	木子火災(放火)16戸焼出, 当時39戸
38年	豪雪(2月6日, 最高4m45cm) 山林を宮林署に売却, 当時27戸
41年	上世屋小分校(3名)
43年	分校休校(2名)当時9戸
45年	分校再開(2名)当時5戸
48~59年	木子地区へ入植者流入(木子住民2戸, 入植者6戸)
60年	教念寺(浄土真宗)宮津市へ売却

(注) 両表とも『高原の磐雪』より筆者作成。

ロ) 人口の推移(世屋村)

国勢調査	合 計	男 性	女 性	世 帯 数
大正09年	1,394	709	685	
14年	1,394	692	702	
昭和05年	1,357	677	680	
10	1,282	639	643	260HH
15				245HH(昭14)
20				
25				
30	1,235			242
35	1,087			233
40	648			164
45	432			124
50	339			113HH
55	263			98
60	222			90

それでは世屋村の戦前, 戦後の様子を見ていくことにする。尚戦前は資料の関係で昭和14年の国勢調査の資料をもとにする。

(イ) 土地

民有地有(粗地)

	田	畑	宅地	山林	原野	牧場・雑種地	計
段 別	171.1	119.1	29.307	486.1	13.1	10.2	800.3町
地 粗	368	127	35	22	1	—	553円
民有地(無粗地)							2.4町
免粗年期地							9.0町

(ウ) 社寺 総数 8

4 社	有坂神社() 世屋姫神社(世屋)	山口神社() 東神社()
4 寺	松源寺(松尾) 教念寺(木子)	慈源寺(上世屋) 唯念寺(下世屋)

(ハ) 選挙

	選挙権を有するもの
村 会 議 員 (定員3)	283名
衆 院 議 員	285名

(ニ) 産業

	金 額	比 率
農 産 物	191,890 ^円	67.96 [%]
畜 産 物	28,961	10.26
林 産 物	45,450	16.10
水 産 物	72	.02
工 産 物	15,957	5.66
計	282,330	100.00

1戸当 1,152.37円

(ホ) 主要農畜

	作付け (町)	石	円	主 産 地
米	164.2	3,215	136,934	全 村
麦	2.0	23	586	畑, 下世屋, 松尾
大豆	7.0	51	2,193	全 村
小豆	13.1	73	3,650	全 村
栗	6.6	48	1,920	木子, 駒倉
計			146,053	

春 蒔	56戸数	1,619	22,278	
夏秋蒔	29	561	6,777	39.2町
計	85	2,180	29,055	

(ヘ) 畜産

	飼養戸数	飼 養 数	出 来 高
畜 牛	173戸	179頭	115頭
養 鶏	40	86羽	39
肥 料		55,900貫	
牛 乳			11,200
鶏 卵		7,740個	422
計			28,462円

(ロ) 林業

立 木 地	無立木地	人口造林	天然造林
1,720	4.	25.	17.7

(ハ) 林産物

木 材	薪炭材	竹 材	木 炭	その他	計
59石	4,374	52束	65,311貫		

出来高(円)

315	15,629	495	25,840	3,171	45,450
-----	--------	-----	--------	-------	--------

(9) 製茶

9 町	44戸	50貫	153円	畑, 下世屋, 松尾
-----	-----	-----	------	------------

ハ) 村の配置

過去2回にわたる火災で村のロケーションを少しずつ変えてきたが、さして大きな変化をみせることはなかった。しかし現存する村は昭和19年の大火後さらにその後の高度経済成長のあおりを受けてその概況をすっかり変えてしまっている。

いまそれを復元する古老の記憶や記録が不足しているが、幸い大火以前の村のロケーションが冊子に残されたものがみつき、それと現存するむらのそれとを比較してみることにした。

(第4図参照)

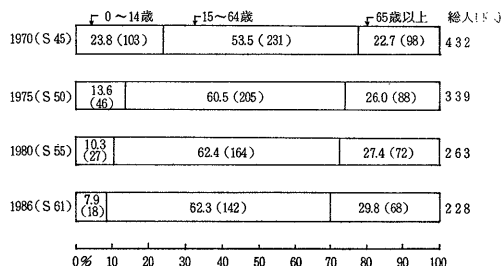
3) 人口の推移

世屋地区の人口の推移(第2表○頁(四)人口推移参照)について次に述べる。昭和29年宮津市制施行により旧世屋村が市に合併した当時7集落242戸、人口1,235人、(1戸あたり5.1人)であった。しかし昭和38年の記録的な豪雪さらにそれに負打ちをかけたのが高度経済成長なかでも近隣町の機業発展に伴った現金収入の道、若者の都市志向などが彼らの足を浮きだたせ家を挙げて離村するというケースが起こりはじめた。38年豪雪の翌年まず東野集落がそして47年には駒倉が完全廃村するに至ってしまった。こうして挙家離村と若年労働者の流失により世帯数の減少は35〜40年に69世帯が、40〜45年には40世帯を減少してしまった。この時期に多くの挙家離村が集中したが、その後この挙家離村の傾向はいぜんとして高い数値で推移しているものの55〜60年にはやや鈍化をみせはじめた。これは若年労働力の人口が底をついたことさらには世帯員の高齢化によるものと考えられるが、それに伴い総人口数の減少率も35〜40年40.4

パーセントをピークに年平均24.2パーセント減少、かくして55年には2集落が廃村、凡そ半分の世帯数に減じ5集落100戸にまで減じてしまった。人口の減は大幅に1,000人マイナスで僅か247人が残った。しかも残ったものは1世帯当たり2人ということから、老夫婦が配偶者を失った単身世帯者と考えれば概ねエンプティネストの観を一層するのは想像をかたくない。事実51才以上の占める割合は木子で81パーセント、上世屋74パーセント、世屋全体で61パーセントと一層の高齢化を物語っている。

こうして進学、就労による若者の流出、挙家離村でピークを終えた昭和45年には世屋地区の老年人口比率は(総人口中65才以上の人口の占める割合)すでに22.7パーセントにも達してしまっていた。当時我が国の老年人口比率7.1また過疎地区でも10.7パーセントであるから急激に相当の人口の高齢化を呈したことは間違いない。その後さらにこれは進み50年には26.0パーセント、55年には27.6、61年ではなんと29.8と人口の3分の1は65才以上の老人で村が占められているということになる。これとは逆に0才から5才未満のいわゆる年少人口の減少が著しい。これは出生率の減少が見られ扶養負担ともあいまって極めて深刻な事態になってきている。単純に計算しても昭和45年当時でも3.5人であったのが50年には3.0、55年には2.7人、ついに61

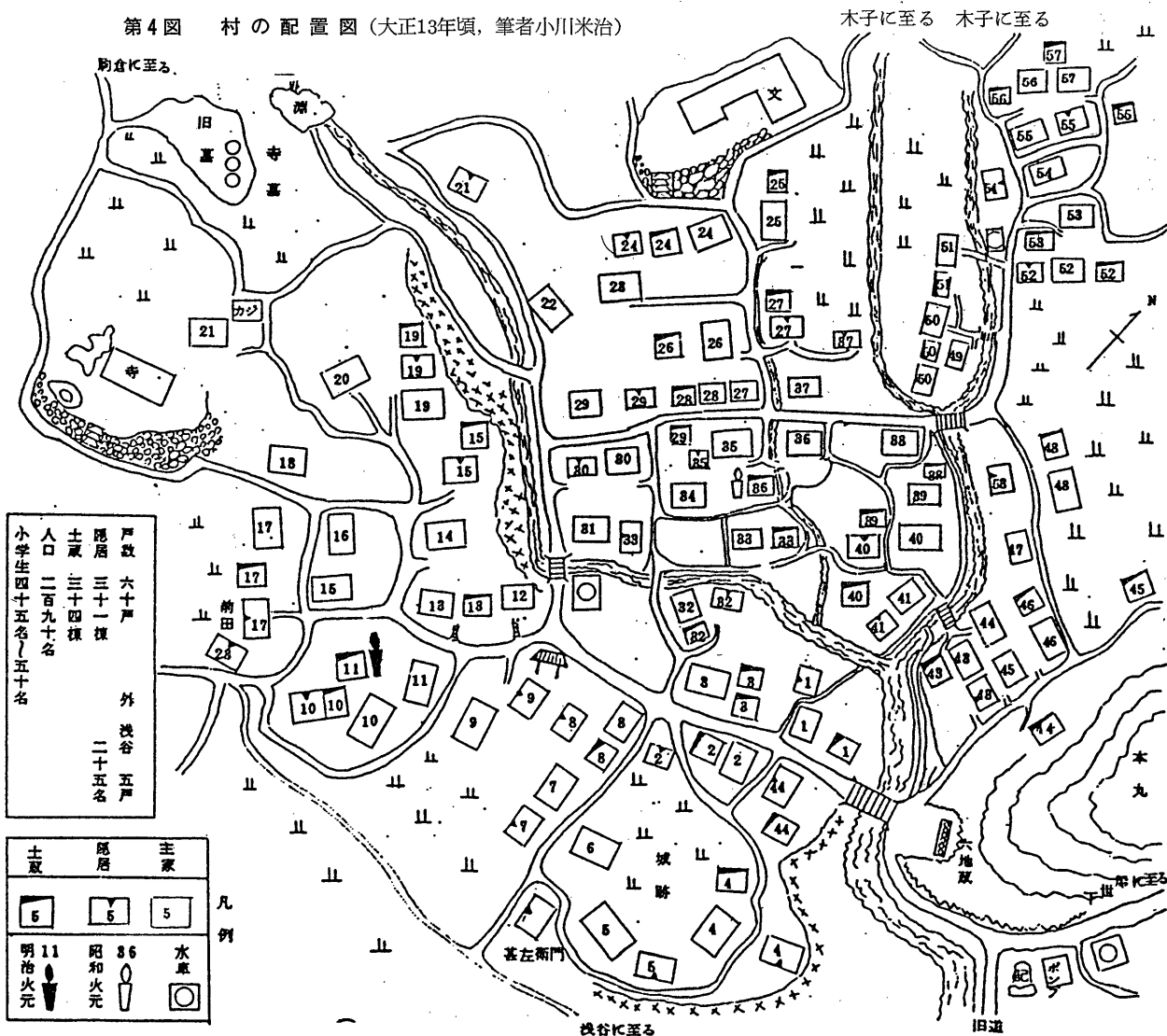
第3図 世屋地区における人口の年齢別構成の推移



第2表 世屋地区における人口推移状況

区 分	昭和 30年	昭和 35年	昭和 40年	昭和 45年	昭和 50年	昭和 55年	昭和 60年	増 減 率 (%)					
								35/30年	40/35年	45/40年	50/45年	55/50年	60/55年
世屋地区	人口	1235	1087	648	432	339	263	△12.0	△40.4	△33.3	△21.5	△22.4	△15.6
世屋地区	世帯数	242	233	164	124	113	98	△3.7	△29.6	△24.4	△8.9	△13.3	△8.2

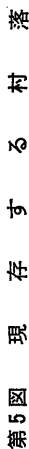
第4図 村の配置図（大正13年頃，筆者小川米治）



10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
小川吉五郎 7	小川午蔵 8	吉岡喜衛門 6	吉岡勇治 6	吉岡栄二郎 5	吉岡卯之助 3	小川米蔵 6	小川喜兵衛 8	吉岡馬蔵 6	小川亀蔵 5
20	19	18	17	16	15	14	13	12	11
小川源兵衛 5	大江清松 5	大江清蔵 4	大江秀治 4	小川権吉 4	光野熊蔵 6	小川彌太郎 4	小川富三郎 4	吉岡重左衛門 5	小川市蔵 7
80	29	28	27	26	25	24	23	22	21
吉岡勝蔵 5	吉岡作蔵 5	小川幸右衛門 8	吉岡留蔵 5	小川富蔵 8	小川定右衛門 4	吉岡喜太郎 4	小川市郎兵衛 5	江宮駒五郎 6	光野庄蔵 7
40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
小川時蔵 5	小川松蔵 6	小川長治 5	光野和衛門 6	光野市蔵 6	光野三吉 5	光野勘七 5	小川政治 6	吉岡喜久蔵 6	吉岡国蔵 5
50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
小川石松 6	小川松助 8	小川藤吉 7	大永孫次郎 4	大永鶴蔵 3	小川芳蔵 4	小川仙次郎 6	小川蔵蔵 6	大江嘉平治 6	
80	70	67	57	56	55	54	53	52	51
橋本嘉三郎 2	光野喜市 4	前田金太郎 4	吉岡順治 5	小川定治 4	吉岡虎五郎 5	小川留蔵 5	大江又蔵 6	吉岡初衛 5	光野美代吉 4

4) 就業構造

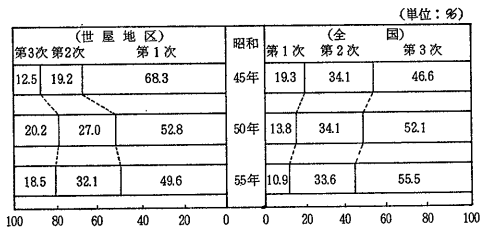
これで分かるように昭和45年就業人口の総数は281人、50年233人、55年183人とワンウエーに減少の傾向を示した。つまりこの10年間で97人減退実にその減少率は34.5パーセントとなっている。第2にその産業別内訳であるがいくつかの特徴がみつかると。それは第1次産業の就業人口の著しい減少である。なお第2、3次産業についてはほぼ横ばいに推移していることが分かる。ところでこの減少要因であるが地区の人口減少殊のほか労働力人口（15～65才未満）の流



第3表 産業別の就業者数割合 単位：％(人)

区 分	1970(S 45)	1975(S 50)	1980(S 55)
第一次産業	68.3(192)	52.8(123)	49.6 (91)
農 業	64.1(180)	47.2(110)	41.3 (76)
林 業	4.3 (12)	5.6 (13)	8.2 (15)
水 産 業	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
第二次産業	19.2 (54)	27.0 (63)	32.1 (59)
鉱 業	0.0 (0)	0.0 (0)	0.0 (0)
建 設 業	2.8 (8)	6.0 (14)	8.2 (15)
製 造 業	16.4 (46)	21.0 (49)	23.9 (44)
第三次産業	12.5 (35)	20.2 (47)	18.5 (34)
卸売・小売業	1.1 (3)	3.0 (7)	3.8 (7)
金融・保険業	0.3 (1)	0.9 (2)	0.5 (1)
不 動 産 業	0.0 (0)	0.4 (1)	0.0 (0)
運輸・通信業	1.8 (5)	3.9 (9)	1.6 (3)
電気・ガス・水道	0.0 (0)	0.4 (1)	0.0 (0)
サー ビ ス 業	7.8 (22)	10.3 (24)	12.0 (22)
公 務	1.4 (4)	1.3 (3)	0.5 (1)
失 業	0.0 (0)	0.9 (2)	0.0 (0)
総 数	100.0(281)	100.0(233)	100.0(184)
労働力人口	281	235	184
15歳以上の人口	329	293	236

第6図 産業別就業人口の構成比



出と農林業就業者の高齢化であろうことは容易に想像がつくであろう。それにもう1つコペルニクス的な変化をみせたのがこれまでの農業から比較的安定した収入の入る第2次、3次の産業就業者へと転向したことであろう。むしろ彼らの地区定着の高さを実証している。さらに産業別就業人口の構成比を全国と比較してみるとこの地区での第1次産業構成比が際立って高いことがいえる。むしろこのことは第1次産業が世屋村にとって重要な産業であり見方をかえれば地域の負の条件であったり、ネガティブな変化過程の1条件となっていることは想像を堅くない。

続いて世屋地区における専業、兼業別農家構

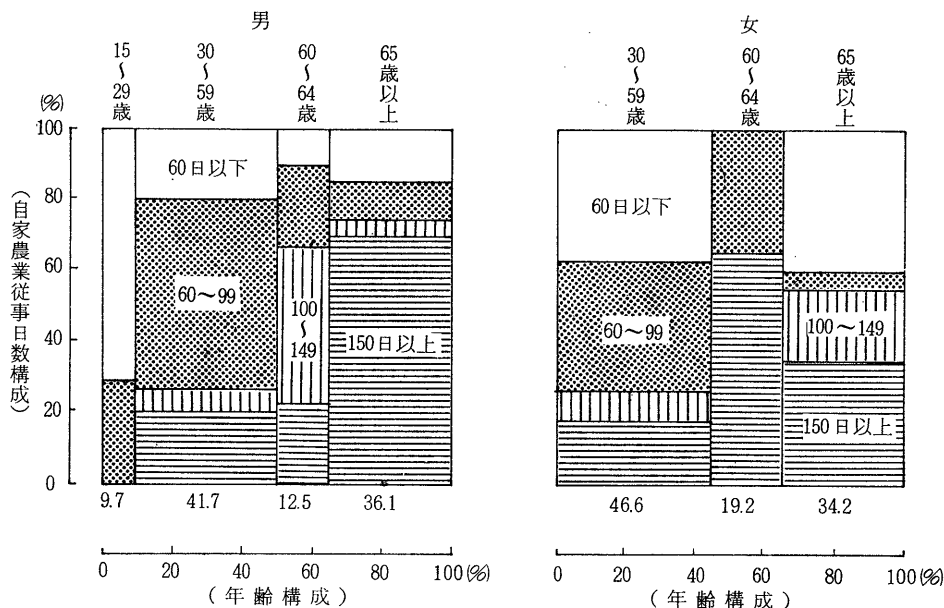
第4表 世屋地区の専業別農家数

	年 次	総農家数 (戸)	専 業	兼 業	
				I 業	II 業
実 数 (構成率)	1960 (昭和35)	197 (100.0)	77(39.1)	111(56.3)	9 (4.6)
	1965 (昭和40)	140 (100.0)	87(62.1)	35(25.0)	18(12.9)
	1970 (昭和45)	105 (100.0)	33(31.4)	36(34.3)	36(34.3)
	1975 (昭和50)	87 (100.0)	24(27.6)	10(11.5)	53(60.9)
	1980 (昭和55)	69 (100.0)	18(26.1)	9(13.0)	42(60.9)
	1985 (昭和60)	63 (100.0)	19(30.2)	12(19.0)	32(50.8)
	増 減 率 (%)	昭40/35	△28.9	13.0	△68.5
45/40		△25.0	△62.1	2.9	100.0
50/45		△17.1	△27.3	△72.2	47.2
55/50		△20.7	△25.0	△10.0	△20.8
60/55		△ 8.7	5.6	25.0	△23.8

成の動向をみておこう。第4表に示したが、ここからいくつかの特徴を抜き取ることができる。まず昭和50年までは農家数の減少と共に専業農家数や第1次兼業農家数の減少がみられること、またそれとは逆に第2次兼業農家数が増えてきており、いわゆる2種兼業化の様相がみられる。但し、昭和35～40年にかけて10戸(増加率13.0パーセント)専業農家の増加をみたのはこの時期挙家離村した世帯の耕地売却による一時的な耕地拡大のためである。ところが昭和50年代になるとしかもその後半では総農家数の減少にも鈍化がみられるようになる。つまり専業農家の安定した推移がみられた。これは1つ、後継者に恵まれたこと、2つ、補助金による経営の拡大、3つ、優良な農家が残ったことなどが挙げられる。こうした状況はいましばらく続くものと県や市の職員は考えている。

また言うまでもないことだが農業就業者の中にも高齢化がすすんでいる。因みに自家農業従事者の年齢別従事日数をみると(第7図)、およそその半数が高年齢で占められている。また年間150日以上農業に従事している者を合わせると、男子では65才以上、女子では60～64才がもっとも多い。当然リタイヤーして隠居の身でありながら、ここでは自らの生計維持のためとはいえ現役ではたらかざるを得ない現状を物語っているのである。

第 7 図 自家農業従事者の年齢別従事日数別構成



III. 過疎化する村

1) 集落規模の縮小化の時期

坂口論文を参考に世帯減少率の50パーセント以上の集落（40集落）から資料をえた24集落の集落規模の縮小化をみることにする。(表5)に示したのがそれであるが丹後半島の山間部ではすでに明治の初期から世帯の欠落がみられる。ことに明治39年ころまでは緩慢だったが、同40年から大正10年まで目立った欠落をみせた。しかし昭和9年以降変化なく27年突然集落の縮小

期を迎えた。35年から40年にかけてこれまで見なかった大変化をみせるに至った。

2) 廃村化の時期

廃村化についていろいろ議論の分かれるところであるが、今日3つに整理されている。1部宅地廃村、全面宅地廃村そして完全廃村の3つである。さて、この分類に従って世屋地区の廃村をみると全面廃村は東野があり、1部宅地廃村は駒倉がはいる。さてその時期であるが普通

第 5 表 丹後山間24集落の挙家離村の年代地域別移動

	明治 5~19	20~29	30~39	40~ 大正2	大正 3~10	大正11 ~昭和2	3~8	9~20	21~26	27~34	35~40	小計
期 間(年)	15	10	10	7	7	6	6	12	6	8	6	
行方不明(戸) (廃 家)	12	10	5	2	6	2	1	1	0	1	4	42戸
近 距 離 移 動 (隣接集落)	0	4	5	7	6	0	11	3	1	13	13	63戸
中 距 離 移 動 (丹後地域内)	0	1	1	9	8	8	5	11	5	22	56	126戸
(宮津岩滝への移動)	(0)	(0)	(1)	(1)	(1)	(1)	(0)	(2)	(2)	(5)	(17)	(30戸)
遠 距 離 移 動 (京都市その他)	0	0	4	2	0	1	5	8	4	3	8	35戸
移 動 数 合 計	12	15	15	20	18	11	22	23	10	39	81	266戸

(注) 坂口慶治「丹後半島における廃村現象の地理学的考察」p. 46より作成。

昭和7, 8年いわゆる昭和恐慌、丹後大地震を背景に起こった廃村を第1期全面宅地廃村という。さらに朝鮮動乱以後昭和27, 8年から40年までの10年間で第2期全面宅地廃村とよぶ。したがって、この第2期に世屋地区駒倉がはいる。

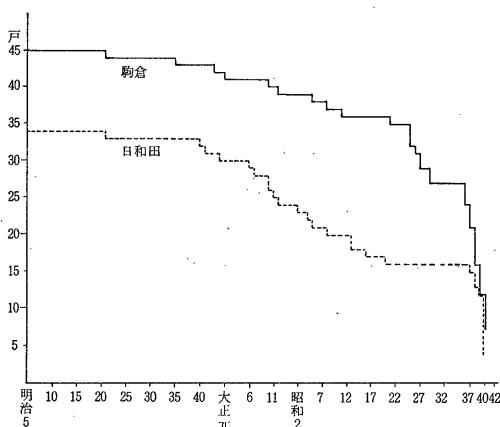
3) 廃村にいたる過程

これにはいくつか整理されているが、

- イ) 近距離転居。就農通い耕作型
- ロ) 近距離転居。就農通い耕作型と中距離移動、機業転向型の混合
- ハ) 近距離転居。通い耕作。賃労兼業型
- ニ) 中距離転居。機業転向。小作兼業型
- ホ) 昭和38年豪雪による中距離転居。賃労、小作兼業型—(東野)
- ヘ) 昭和38年以降の経済上の動機による廃村—(駒倉)

但しこの(ヘ)の場合(駒倉)は山林280ヘクタールを国に集団売却(昭和39年)これによる完全廃村(当時生活保護世帯3戸、年間10~17万円未満5戸、20万以上1戸)

第8図 丹後半島における部分廃村の縮小過程



4) 過疎化する村；世屋の場合

世屋地区では、昭和35~40年の間に人口流出がピークをむかえたことは第Ⅱで述べたとおりである。離村はすでに昭和30年以前より始まっていたが、本節では昭和30年以降の離村の発生要因を若干考察していくことにする。

イ) 離村の社会的・経済的要因

世屋地区は、耕地が総土地面積の2%と恵ま

れた地理的条件ではなく、稲作と雑穀作の零細な農業経営と低位生産性を特色としている。そのため地域の経済基盤が山林に依存する割合は、高い傾向にあった。

昭和30年頃まで稲作を中心として雑穀・畜産・養蚕・製炭・紡織(藤・麻・木綿織り)など農業生産以外にも多様な産業を取り入れて生計を立てている。むろん、これは農繁期と農閑期の労働を効果的に配分することに他ならないが、冬季の生計費調達上、極めて重要な手段となっていたのである。

産業を集落別にみていくと、製炭業は木子・駒倉・上世屋などでみられる。藤布紡織は上世屋・駒倉・木子で盛んであり、製紙(和紙)は畑に限られる。その他は、どの農家でもみられた一般的な農業経営であった。

しかしながら、こうした山村経済も次の要因で悪化するのである。

①昭和30年初頭に始まる経済の高度成長は、農山漁村の外に於いて重化学工業を急速に発展させ、大都市の労働市場を拡大させていった。農山漁村は、そうした工業製品の販売市場として把握されたこと。

②我が国の開放体制の開始に伴い石油・ガス・電気への燃料転換が、従来の石炭・木炭・薪を革命的に駆逐したこと。

③昭和30年を過ぎる頃から小型耕転機が普及し始め、和牛価格が下落したこと。

④外国産木材の大量輸入は、国内産木材を低迷させ、山林価値を相対的に低下させたこと。

以上のような日本の産業構造の急激な変化は、村の社会構造を大きく動揺させ、地域産業を潰滅させている。世屋地区でも農家の副業として行われてきた商品生産部門の産業は、この頃を境として、衰退している。特に林業収入に依存する住民に与えた影響はかんたんであったといわねばならない。燃料革命の影響により木子・駒倉では、冬季出稼ぎがみられるようになる。これなどは山村経済の悪化で生活基盤が弱体化し、農民層の分解が始まったからであろう。「炭や薪は金にならない。しかも毎日の生活は現金第一」とした状況が出稼ぎを促し、離村を早めることになったのである。

また⑤耐久消費財の普及による山村生活の近代化、⑥第二、第三次産業との生産性と所得格差の拡大、⑦生活水準の地域的格差は、住民の生活意識を後退させ、「やる」気を喪失させる原因になっている。これは生活程度の上昇に農業生産がついていけなくなったことを示しているが、他方では生活欲求の高まりともなるのである。つまり都市的生活様式に近づくことが生活向上の唯一の道と考えられるようになるからであろうか。この時期には農家の二、三男坊ばかりでなく、長男の流出も同時に起こっている。

若年労働力の流出は進学・就職を契機として起こっているが本質的には農（作）業の忌避、都市的生活様式の羨望、ホワイトカラー志向にある。

さらに通信網や交通網の整備は、平地住民との交通機会を増やし、自村と他市町村とを比較・推量させる機会も増やした。

また昭和35～40年は、丹後地域が企業景気に乗り、発展した時期でもある。これは世屋地区の人口流出のピークとも一致する。そして地区の挙家離村世帯の多数は、岩滝町などの機業地に集中して集まっている。これは機業景気による雇用の創出効果が、挙家離村を促す要因になっていることを示すものであろう。

しかし挙家離村の発生は、根本的には機業景気や火災、豪雪でもなく、農林業の不振に規定されるところが大きいといえる。

ロ) 離村の地域的要因

a) 劣悪な自然条件

世屋地域は豪雪地帯であり、風水害や火災が頻発してきた地域である。

①雪害

積雪は2～3メートルが普通であり、これが生産と生活の障害になってきたことは確かである。昭和38年の豪雪では4メートル以上も降り積もり、警察機動隊の救援を受けている。この時の挙家離村が、30年代の離村の中で最も多いという結果を出している。

②風水害

風水害の例は、昭和9年の室戸台風による被害の記録しか残っていないが、しばしば発生していたと思われる。本地域は新第三紀砂泥岩に

立地するため、集中豪雨や長雨を受けると地すべりや山崩れを起こし易い。農作物などに被害が出易い。

③火災

消火施設の不備さらには草葺き屋根という構造のため、一旦、火災が発生すると場合によっては村全体が壊滅の状態になる。

上世屋地区では2回、木子地区でも2回大火が発生している。

だが前述の自然災害の発生は、直接、挙家離村の原因とはなっていないと思われる。大半は復旧ないし再建されている。災害による挙家離村世帯の多くは、直接の原因というよりは、むしろ災害を契機とした“きっかけ離村”という方が妥当であろう。

b) 公共設備の不平等配置

世屋地区では自村内に教育施設を持たず、幹線道路から隔たった地区から挙家離村が相次いでいる。廃村になった駒倉・東野は、全てこの条件を満たす。また松尾地区もその例外ではない。

これは教育施設・幹線道路・医療機関から遠隔であることが、山村生活の不便さを自覚させるからであろうか。この他教育施設からの遠隔は、挙家離村の大きな原因になっている。このように公共設備の不平等な配置が生活の便益を求めさせ、挙家離村を促進させる要因になっている。

ハ) すべり要因

さて、次に村を去る大きな引きがねとなったものはなんだろうかを考えてみよう。すなわち離村者に打げきを与えた「すべり要因」になったものはなにかということである、大きく4つに分けられる。その1つは自然的すべり要因と仮にいうものである。これはこの村を作っている自然環境を意味している。さしずめ静かな平和な村とは正反対に厳しい自然の驚異がその裏面にはあった。過去、現在さらに将来にわたって住民を苦しめかつ苦しめるであろう最大の不安要因は大雪、大水、台風などの災害であり、かつ人災でもあった大火の経験である。蛇足になるが何度かこれまで災害に遭遇してきたがいずれもこれは家をあげての離村を踏み留まらせたのはこれらをプロテクトする気持と人手を擁したこ

とと無関係ではなかった。第2の「すべり要因」は高地ゆえ比較的気候が良く住環境として最適な場所であるが海岸から（日置）から数キロの隔たりだがきわめて道巾が狭く随所に危険なカーブがあることと関係している。「すべり要因」の第3は村の産業資源の枯渇である。むらの重要な基幹産業であった従来山林と田畑による生活基盤が高度経済化により農山林業が不振と政策転換を余儀なくされ農山林業の将来性を失ったこと、さらにはそれがもろに村民の心とその伝統的自治組織を直撃したことにある。当然就労への機会や保障の自由が大きく疎外されてしまったこと。以上人間の安全や保障をもとめるニーズが充足されないために起きた「すべり要因」、といえる。さらに第4のそれは村民が直接に見た過疎と関係してる。これまで60戸近く集落があり密集ゆえに問題もあった。だが彼等が今見ている「負の条件」や「ネガティブな変化過程」としての挙家離村、廃村、単身出稼ぎ、子の就学、就労、結婚などによる人口移動によって引き起こされる人口減（小家族化）さらには田畑、家、屋敷の荒廃、廃屋、捨て逃げなどなどマイナス条件があまりにも多く、これらは村人に村への定着をゆるがせにできない。まず人口の減 即過疎 即マイナスイメージ という 短絡的な「すべり」かつ「目減り要因」が働いたものと察する。いわば心理的不安をあたえたことは否めないであろう。さらに第6の要因は主として家族に関係したもので家族の直面するイベント（危機）に関連している。家族周期上いくつかの家族危機の時期があるがそれと1、2の「すべり要因」と重なったいわゆる複合要因による滑りがある。そのうち最大のものは子の教育に関するものである。つまり親はこの村を離れるわけにはいかないがせめても子には相当の教育を受けさせて村から脱出を願う親心が側面に流れる「すべり要因」がある。まさに不良住宅（都市スラム）に居住する越境を願う親の心境に似ている。換言すれば公平な社会参加や自由を求めるニーズで緩く縛ることができるものである。その他、病気（疾病）子育て、空巢（エンブテーネスト）、結婚、就労、貧困など家族周期上直面する危機が直接「すべり要因」として作

用したカテゴリーである。とくにこのカテゴリーの中で比較的数の大いのが老後の不安を挙げるものが少なくない。続いて第7の要因は人口減による人間関係の喪失が引きがねになっている場合である。「子がいらない」「家族がいらない」「親しい仲間が居ない」「親類、縁者がいない」「兄弟がいなくなった」など、さらに第8のそれは地域的な問題として村のなかに何らかの理由で（出火、犯罪、水泥棒などで）なかばムラ8分を受けていたものがこの機会に「すべり」と称して離村したケースが含まれる。最後に子や仲間（離村者）から誘われて離村を決意したものなどが大きなインパクトとして与えられた影響は大である。このほか全く個人（世帯主）の都合や理由で挙家離村もすくなくないただしその理由については明かしてくれないので今のところは分からない。ただし1～2例だけが居住の自由（つまり何処に住んだって自由ではないかという意見の持ち主）をその理由として挙げている。

以上「すべり要因」中心に離村していった者たちの意識を述べてみた。続いてではどんな属性が「すべり要因」として一般的傾向をもつかを幾つか整理しておきたい。

二) すべりの属性

ここでは今回分析した幾つかの属性に限って記述する。まず年齢、性別であるが男性は女性に比較して「すべり」が容易であることが言えそうである。年齢では4,50才と60才以上にすべり傾向が強いように思える。前者は就労指向や家族周期の危機と譜合し、後者は個人的要因や子供や仲間からの誘いとよく譜合する。第2は財産の大小と関係するのだろうか、それによると概して例外はあるが田畑、家屋敷、山林の小つまり経済的にはやや貧に属する階級に「すべり」が見られる。これまでの村における役職（地位、役割）名誉（村の功労者）との関係ではやや役職の経験者群に「すべり」が多く功労者では数が少ないのではっきりいえないが余り関係ないように見える。ただし5戸中2戸は「すべり」ですでに早い時期に離村しており。次にあげる教育程度とも関係してややおおざっぱな言い方をすれば、教育程度の高いほうにシフトがみられる。さらに村の関係として親族や親類

第6-1表 挙家離村者の就業構造調査〔その1〕 岩滝町・加悦町野田川転入分（実態調査の対象になった18戸について）

調査 世帯 番号	離村 年次 (年月)	家族 数 (人)	離村元	離村前 の農業 経営規 模 (田の み)	就 業 先 (続 柄 別)					自家営業 の 規 模 農業 (反) 機業 (織機 台数)	就職経路(続柄別)					賃金支払形態				被用継金額 昭和40年 5月分 (円)	自営機業 の粗収入 (継続を) 含む
					男		女				1 職 安	2 親 戚	3 知 人	4 広 告	5 開拓 個人で 他	1 請 負 給	2 月 給	3 日 給	4 時 間 給		
					自 営	被 用	自 営	被 用													
								機 業	そ の 他												
1	昭和 40.1	4	宮津市 駒倉	(反)	(主)農 業	(主)織物工業 組合加工場	(妻)機業自営	(主)農園仕 事手伝 (妻)世界長 ゴム(株)被用 (主)子 守 (妻)町役場 用務員	3 (反) (借 3)	(台) 1					(主)			(主)	(主)15,000	1日1.5反 1反=700円	
2	37	3	"	8	(主)農 業	(主)機業自営	(妻)機業自営		4.1 (借)	2							(妻)		(妻)14,000	1日1.5反 1反=650円	
3	37	4	宮津市 木子	3	(主)大 工		(妻)機業被用機														
4	39.5	7	宮津市 駒倉	13	(義の父)農業	(主)K興産(株) (建築業)の 運転手	(妻)機業被用機			3 (借)				(妻)		(主)		(主)	(主)30,000		
5	38.3	5	"	8		(主)店 員	(妻)機業自営			2			(主)					(主)	(主)15,000	1日1.5反 1反=650円	
6	39	6	"	10	(主の父)農業	(主)信用金庫	(妻)機業被用			3 (借)			(妻)	(主)				(主)	(妻)	(主)23,000 (妻)15,000	
7	40.5	2	"	2												(主)町の 世話			(主)	(主)8,000	
8	40.4	5	"	8		(主)町役場用 務員							(主)	(妻)				(主)	(妻)	(主)15,000 (妻)10,000	
9	40.5	5	"	9	(主)製 麵 業 (準備段階)									(主)							
10	40.5	3	"	2		(長男) 機業被用				(主)子 守				(長男) (妻)				(長男)		(長男) 13,000	
11	37.4	4	"	7		(主)公民館用 務員				(妻)町役場 用務員				(主)				(主)	(妻)	(主)14,000 (妻)13,000	
12	40.5	4	"	8		(主)N冶金岩 滝工場	(妻)機業被用									(主)町の 世話			(主)	(主)13,750 (妻)10,000	
13	39.4	5	宮津市 木子	6	(主)農 業	(主)牛乳配達 員	(妻)機業被用			2 (借)				(主)							
14	39.12	7	"	15	(主の父)農業	(主)E産業機 業被用(工員)	(妻)機業自営			5 (借)	2		(主)					(主)		(主)17,000	
15	33	7	"	8		(主)米穀店被 用(店員)	(妻)機業被用						(主)	(妻)				(主)	(妻)	(主) ? (妻) ?	
16	34	7	"	10		(主)クリーニ ング店勤務 (34~37年 迄日雇)	(妻)機業自営 (34~39年迄 機業被用)			3 2 (借)	1		(主)	(妻)				(主)		(主)20,000	
17	29	10	"	12	(主の父)農業	(主)機業自営	(妻)機業自営			3・(1) (借)	3		(主)	(妻)						月70,000~ 80,000	
18	39	4	"	12	(主)農 業	(主)S 鋳物店	(妻)機業被用		(長女) 機業被用	0.6				(主)	(妻)			(主)	(妻)	(主)16,000 (妻)10,000	

(注)1. ① (主)…世帯主, (妻)…世帯主の妻, (主の父)…世帯主の父, (主の母)…世帯主の母。

② 調査世帯番号1~13迄は転入地は岩滝町, 同じく14~18迄は加悦町である。

(注)2. 「限界的地帯の挙家離村をめぐる諸問題」: 昭和40年10月, 京都府立大学学報告 (向井利栄著) より。

第6-2表 表挙家離村者の就業構造調査〔その2〕野田川町転入分

調査世帯番号	離村年次 (年月)	離村元	離村前の農業経営規模	現在の農業規模 (<small>()</small> はうち小作面積)	就 職 先 (続柄別) - (離村当初年度)					離村前の経済型	現在の経済型
					男		女				
					自 営	被 用	自 営	被 用	機 業 其 他		
1'	33.12	宮津市木子	反3.7	—		長男(37) 日本冶金工員		主(56) 織 工		農・日雇	織工・工員
2'	34.5	〃	14.0	31.2(17.2)	主(63)農業	長男(31)店員 次男(27)農協職員	妻(60)農業			農・出稼	農・自織
3'	37.3	〃	24.5	6.3 (6.3)		主(39) 丹後精工工員	妻(37)農業			農	農・織工
4'	39.4	〃	17.0	10.2(10.2)	主(63)農業			妻(52) 織 工		農	農・織工
5'	39.12	〃	9.0	4.0 (4.0)	主(73)農業		妻(64)農業			農	農・織工
6'	39.12	〃	9.0	—		主(41)塗装工			妻(39) 学校炊事婦	農	工員・炊事婦

(注)1. 「農家労働力移動と農業構造変化に関する研究(挙家離村)」S41.3 東京教育大学農学部より内容組みかえ作成。

(注)2. カッコ内数字は年令。(主)(父)等は、表6-1に準ずる。

の付き合いの程度では親族の密な方が粗より
ゝとまり、の度合いが強いうに常識的に考えられるが結果はどうだろうか。むしろ密の方が移動性に富んでいることが分かる。また、氏子や講仲などによる村人相互の互助組織ではゝすべり、の防止要因とはなっていない。むしろこれは村のシンボルとなっていた寺の廃寺が大きく作用している。この寺の離村の時期を境に

ゝすべり、がなだれ現象のように続出したことと無関係ではなかろう。なお1つ有意差のあった属性の中に「子や若者の脱出」を挙げているやや経済的要因が主であるが、それによって引き裂かれた村民のところ(集団の組織化、集団の凝集性、行動の基準化)という社会学的な問題が危機もしくは解体の過程で捉えられることができる。

IV. 過疎対策の現状

京都府が過疎対策として講じた代表的なものに丹後縦貫林道が挙げられる。丹後半島の山並を尾根づたいに縦走する丹後縦貫林道は、施設工事を地元に請け負わせることにより、働く機会を与え、現金収入を得させ、併わせて交通手段の便を計り、住民を地元に定着させることを目的としている。

1) 丹後縦貫林道概要

丹後縦貫林道は、住民の強い要望により、昭和44年から12年の年月を経て昭和55年に開通した。工事は4区間に分割され、総延長約46キロメートル、幅巾4メートルを有している。

当初、総工費8億円で44年から5カ年計画であった林道は、総工費23億8,758万9千円を要した。このうち上世屋村は、第2区間、宮津市成谷から上世屋内に含まれている。

総線3,200ヘクタールにおよぶ広大な森林資源、特に15万9千トンにおよぶ木材資源の開発の促進を図り、共に健全な森林づくり、支線(上世屋-藪田)の開発、整備、林業開発の合理化の促進、農畜産業振興をも図る。又、健全なレクリエーション施設としても活用することを目標としている。

2) 観光・レクリエーション基地整備計画

宮津市には、古くから「天の橋立」などの観光名所が存在する。この計画は新しい観光地として森林開発を行うもので、宮津市における観光・レクリエーション地の整備地として、世屋、栗田、大江小地区の整備が行われている。

この計画は、現在進行中であり、上世屋村も世屋高原地区として観光整備地に含まれている。

宮津市としては、おおむね10年前後を展望と

しており、過疎地を観光地化して過疎を防ぐと意図している。

従って将来が期待されており、地域住民は、観光・レクリエーションの意義、重要性などについて理解を深めるとともに、地域を住みよく、美しくする「町づくり」に積極的に取り組むことが望まれている。又、早期完成にむけての、行政、地域住民、観光関連事業者などの役割分担協力が望まれる。

3) 世屋高原家族旅行村の概要

世屋高原は、気象条件が厳しく、交通条件が悪いことなどから、昭和38年の豪雪を契機として離村が進み、急激に過疎化が進行してきた。しかし反面、高原の優れた自然や雄大な環境に恵まれ、周辺には、ガラシャ夫人の隠棲地であった味上野や上世屋、木子などの静かなたたずまいを残す山村が点在しているほか、海岸部まで数十分の距離にあり優れた立地条件を有しているため、丹後縦貫林道沿線に展開する高原の広がりや、豊富な自然環境、山村分化を活用して、四季を通じて楽しめる大規模で総合的な観光レクリエーションゾーンを形成する。その計画の一環が「世屋高原家族旅行村」である。

現在、家族旅行村をはじめ、体験実習館、ケビン村などの宿泊施設が導入され、上世屋村内の体験実習館では、水車を利用した、昔ながらの製粉装置が置かれ、実際にソバを作る作業が体験できる。(図10-2.3.参照)

その上で、将来へ向けて、森林公園、テニスコート、キャンプ場、グラウンド、観光牧場などの整備をきめ細かく行い、大自然の中で手軽な観光、レクリエーション活動を楽しみつつ保護し、また、自然とのふれあいを深めることのできる新しい観光・レクリエーション基地として整備していく方針をとっている。

このように、世屋村は、観光保養地として、再出発することにより、過疎を防ぐとする方針(府県グラフ Kyo 第16号特集の1, 世屋高原家族旅行村60.11.30)ある。

4) 開発の基本方針

イ) 丹後半島内陸部の活性化をはかる核とす

る。

厳しい自然のもとで、衰退の一途をたどってきた丹後半島内陸部の地域再生を図るため、地域における生産活動を観光・レクリエーションに組み込み、その多角的な展開を促して、地域産業の活性化を図り。その上で地域におけるストックを活用するにとどまらず、観光・レクリエーション活動を媒介として都市文化との交流を深め、新たな文化ストックの集積を図る。

さらに、既存の山村文化などを保全し、我が国における山村文化研究の拠点として、研究者、外国人旅行者などの滞在研究に共するとともに、一般利用者の体験生活、文化レクリエーション活動にも共する整備を図る。

ロ) 高原、山村のもっている特性を生かした総合的な観光・レクリエーション基地とする。

自然、文化などの資源活用から、スポーツなどの施設利用に至るまで、幅広い活動に対応させたキャパシティの大きい観光・レクリエーション空間とする。また、幅広い利用者層の四季にわたる多様な利用形態に対応させるとともに、優れた景観、自然環境を保全しつつ、広大な美しい高原や豊かな文化をもった山村のイメージをよりたかめる修景整備を行う。

ハ) 地域の自然的、社会的構造に対応した空間構成とする。

高原、山岳と点在した集落という地域空間構造に即した観光・レクリエーション空間構成とする。このため、地域の自然条件および利用変動に対応したフレキシブルで有機的かつ合理的な施設整備をはかる。

また、地域の生産活動の場の充実、整備を図るとともに、生産活動とレクリエーション活動を融合した総合施設整備及び運営を図る。

5) 「丹後地域開発計画」の現状について

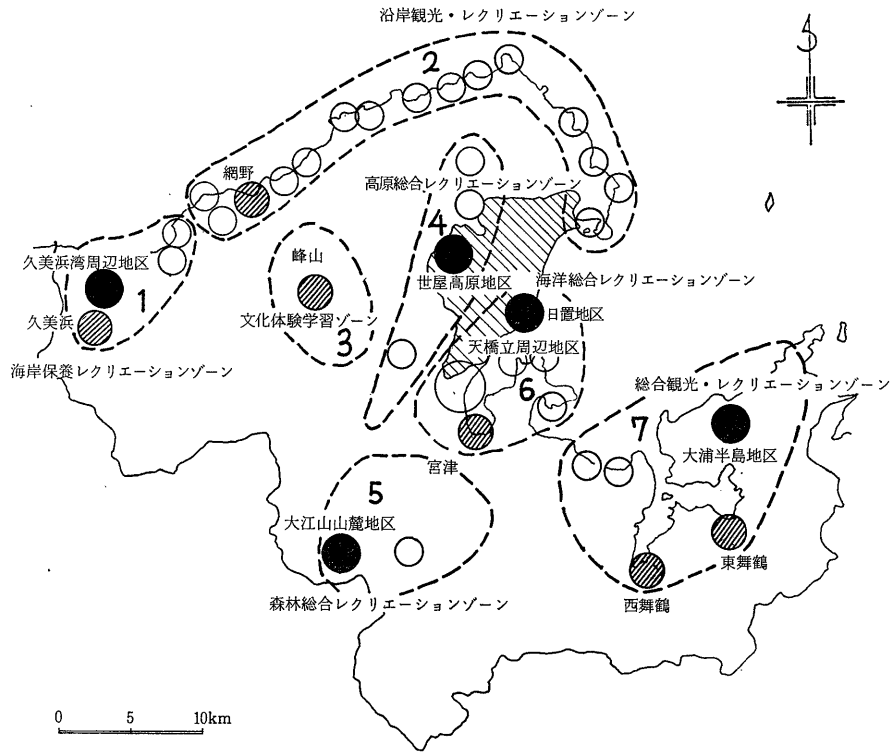
イ) 計画プログラム





本計画は昭和56年まで綿密な打合せをくりかえし、昭和60年から計画実施にうつした。なお計画の時期を60年より75年まで、15年を3期わけ最初の5年を活動段階、次の5年間を発展段階、そして最後の5年間を成熟段階と定めて計画を実施することになった。現在まで、この計

画は第1期の5年計画の期間であるが事業は順調に進められている。その事初めに世屋地区に高原総合レクリエーションの拠点である「世屋高原家族旅行村」(宮津市大字上世屋, 大字松尾に総工費8億6千万円, 昭和56~59年おおよそ

3年をかけて面積約91ヘクタール, 同敷地内にレクリエーションセンター, ピクニック, スポーツ, 花園などの緑地帯, キャンプ施設, 遊歩道, サイクルモノレール, そしてケビン=貸し別荘)を完成させ昭和60年4月オープンさせた。
(第10-2図参照)

第9図 ゾーン設定と拠点地区の配置



拠 点 の 種 別	内 容 容	配 置 地 区
 観 光 拠 点 都 市	丹後地域の玄関口や観光流動の拠点都市に当るので、宿泊・周遊ターミナル機能や都市機能の充実整備を行う地区	東舞鶴、西舞鶴、宮津、峰山、網野、久美浜
 観 光 ・ レ ク リ エ ー シ ョ ン 基 地	丹後地域の観光・レクリエーション開発拠点であり、既存ストックを活用しながら広域観光・レクリエーション需要に対応する整備を行う地区	久美浜湾周辺、世屋高原、日置、大江山麓、大浦半島
 観 光 ・ レ ク リ エ ー シ ョ ン 拠 点	既存の観光・レクリエーション資源・施設を生かし、拠点機能を充実させるためのきめ細かな整備を行う地区	栗田半島、間人、太鼓山他23地区
 特 別 観 光 ・ レ ク リ エ ー シ ョ ン 拠 点	丹後地域を代表する観光・レクリエーション資源であるため、周辺環境の保全・整備の徹底、大量入込に対応した周辺環境、空間整備を行う地区	天橋立

- 1 海洋保養レクリエーションゾーン (久美浜, 湾浜詰周辺)
- 2 沿岸観光・レクリエーションゾーン (丹後半島北岸一帯)
- 3 文化体験学習ゾーン (峰山周辺)
- 4 高原総合レクリエーションゾーン (世屋高原, 碓高原一帯, 丹後縦貫林道沿線)
- 5 森林総合レクリエーションゾーン (大江山, 加悦谷周辺)
- 6 海洋総合レクリエーションゾーン (宮津湾, 栗田半島周辺)
- 7 総合観光・レクリエーションゾーン (舞鶴湾, 大浦半島, 由良川河口部周辺)



第10-2図 施設の配置



施設の概要

▶所在地／宮津市大字上世屋，大字松尾

▶地区面積／約 91ha

▶主要施設

◇レクリエーションセンター

(管理事務室，食堂，研修室，貸自転車庫，休養室等)

◇ピクニック緑地

(芝生園地，スポーツ園地，花園地等)

◇キャンプ場

◇遊歩道

◇サイクルモノレール／寄贈(財)日本宝くじ協会

◇ケビン(貸別荘)

▶総事業費／約 8 億 6 千万円

▶建設期間／昭和56年 4 月～昭和59年 3 月

同時に隣り用地に農林業漁業体験実習館オープン，体験教室（2 棟）をつくり，上世屋を「笹やねの里」，木子を「炭焼きの里」，松尾を「りんどうの里」，下世屋を「岩なしの里」，そして畑を「紙すきの里」として地元の特産物ふれ合いを体験してもらおうとするものである。引き続き京都国体のためその関連施設の建設などなど建設ラッシュが続いている。

ロ) 計画の運営

本計画は府や県さらには宮津市が中心になって進めているがその運営管理にあたっては 2 市 11 町に委託している。つまり旅行村の運営や管理の組織は形式上府から市が委託されさらにその運営は地元の団体（地域住民によって組織されている「世屋の里協会」）に委託されている。

しかし実際計画の決定権はあくまでも府で市や地元団体ではない。このために運営面で多少とも行政（府，県や市）と地元団体との間でぎくしゃくが生じている。

従来，この地元の団体「世屋の里協会」の設立以前は昭和52年「世屋地区振興委員会」を発足させた。これは53年から実施してきた地域農政特別対策事業とからめたいわゆる「むら起こし」を検討してきた組織である。これはもともと，急激な人口減に伴う過疎化（昭和29年当時 7 集落 242 戸 1,235 人が38年の豪雪や高度経済成長に伴う挙家離村，39年の東野集落，47年には駒倉集落があい続いて廃村に迫込まれてしまった。ついに55年には 5 集落 100 戸 274 人にまで減ってしまった）や高齢化（55年の統計では274人

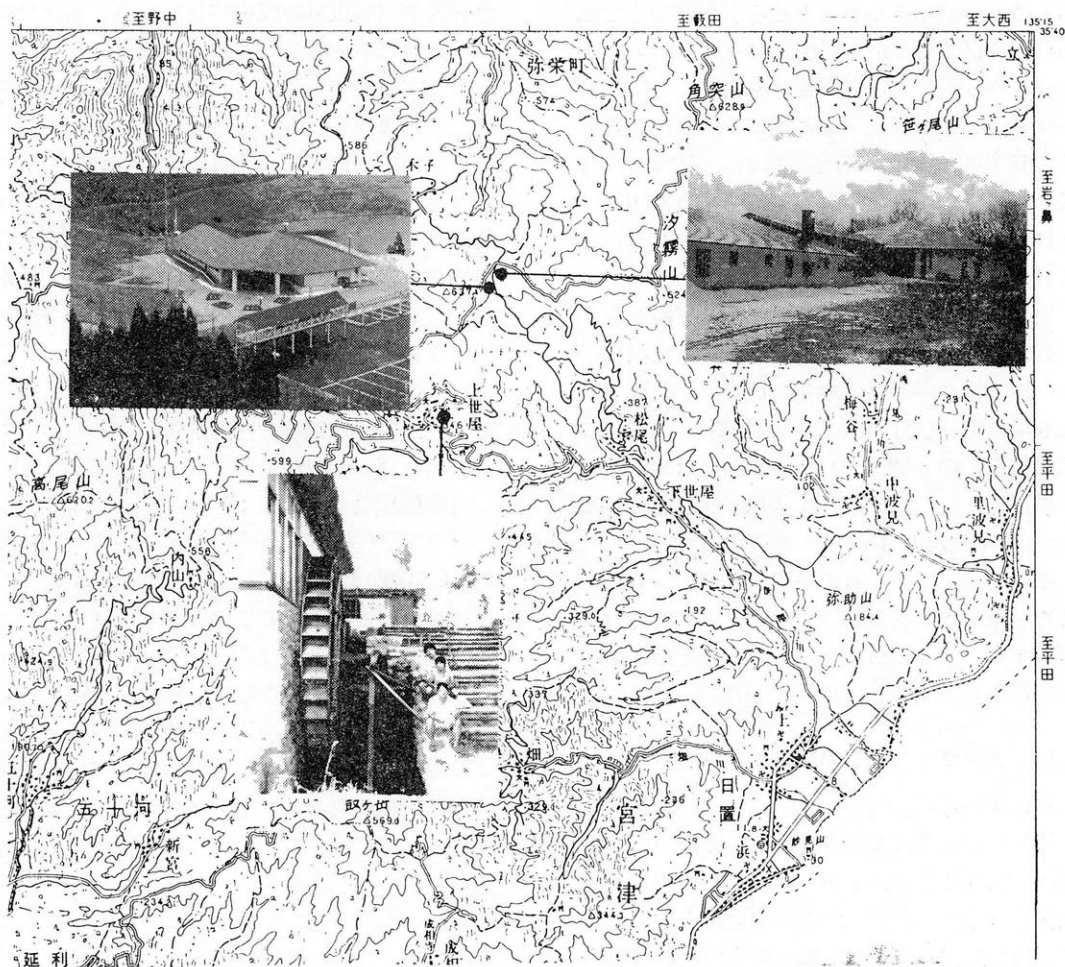
中 51才以上の 占める割合が木子で 81パーセント、上世屋で 74パーセント(地区全体では 62パーセント)に危機感を感じた村民の自治組織であった。なお 56年には「地域協議会」と「集落協議会」とを設立させた。前者は先の世屋地区振興委員会、各自治会長、地区推薦者、農業委員、財産区管理委員長、青壮年部より代表それに「ふるさとを守会」などから選出された 23人から構成され、また後者のそれは各集落より委員(木子 3人、上世屋 8人、松尾 9人、下世屋 10人、畑 7人を決めた)が選出されて会を運営してきた。

協会は具体的な計画案をまず「地域協議会」で計り、市や事業主体である府、近畿農政局、農林漁業体験協会などへ説明交渉に出掛け、その結果を「地域協議会」や「集落委員会」にお

ろされ、住民に周知徹底させるという仕組みにしている。さらには昭和 57年 8月にはこの「地域協議会」を強化するためこれまでのメンバーに新たに離村者や、ふるさとを守会のメンバーを加え総員 120名からなる「世屋の里協会」を発足させたのである。現在この協会には理事 17人、幹事 2人をおき、さらに企画部と事業部の 2部を入れた役員会組織で運営している。

これまで協会の主な活動は体験実習館の運営委員会をつくり具体的な運営の体制とプログラムや地域資源の調査やそのほりおこしを着手したり、また専門家の海外派遣や国内の視察を計画実施した。そのうちの主な活動を紹介すると、まずその目的を自給自足を基調としたバランスのとれた生産、学童や都市生活者とのふれ

第10-3図 各 施 設



あいでもって生きがいのあるふる里づくりを目標にして上世屋を一大観光地にしようとするものである。直接工程を体験できるようなプログラムを考案し、上世屋ではむかしながらの製法で蕎麦づくりを体験できるもの、その他松尾では松尾体験農園（しいたけ栽培）木子では汐霧体験牧場さらには竹細工、わら細工、それに 藤布織り など多彩なプログラミングを実施されている。この間「世屋の里協会」の活動はおおくの新聞に取り上げられた。足助町足助

屋などの先進地調査、山岳遊歩道、「ふるさとを守会」のそば調査、映画づくり（昭和57～59年）、2泊3日の牧場体験「農村ライフ」、その他、伝統技術をまもる藤布織りや汐霧サマーコンサートとバーベキュー大会、世屋の地域資源の掘り起こしの中から出た「日曜市」の模様など枚挙にいとまがない。いずれにしても、世屋の里協会の活動は過疎や廃村の止まりにおおきな影響をあたえてきたことは否むことはできない。

V. 住民の生活と意識

対象とした世屋地区はまさに過疎化、廃村化（一部宅地廃村の過程）をへて完全廃村への過程を通ることが予想されている。当然廃村化を防止するために過疎対策を講じてきたが前節で若干述べたが効を奏するところ少ない。そこで廃村を横目で見ながら村民は何をどう考えているのだろうか、一定の調査票の項目ごとに結果を概説しながら意識をも考察してみる。調査対象（55才以上男性12名、女性19名、計31名に直接インタビューした。尚現地調査は昭和60年11月11～15日、61年5月20～22日、7月28～8月1日、11月21～24日、計4回実施した。

別表に示したような調査票を使って聞き取り調査を実施した。調査に用いた設問は64項目、その内容は次の通りである。1) 生活環境、2) 住環境、3) 就労、4) 農業の将来性、5) 村の自治組織、6) 消費、7) 社会参加（政治、選挙への関心）、8) 保険衛生、9) 過疎と過疎対策についての意識、10) その他死生観など

それでは、結果を概略記述するが、何分にも調査対象の数が制限されているために統計的に整理することを止め、ゆるい縛り方でその傾向を記述する程度にとどめておきたい。

1. アンケート調査の結果(1)

1)の生活環境について；

概して現在住んでいる村(地域)の環境については「困ることはあるが一応満足している」と現状を肯定するとこたえたのが大半をしめていた。但し細かく見ると高齢者の多い村の日常生

活で開発やそれに伴って工事用のトラックや旅行者の車が往来するためその危険を感じている者が少なくない。それを除けば無医地区であるが月1回の医師、保健婦の定期検診があるため急病人や事故以外の医療不安はない。また日常の生鮮食料品や雑貨などの買い物も週3回（火・木・土）定期的に行商が回ってくるのでそれで用がたり不便を感じることはないという。さらに住民の健康増進のため牛乳の飲用が勧められておりそれをとくに多少階段状の坂道を高齢者は伯母車や杖を頼りに週に何回か大橋のたもとの農協まで村内を移動せねばならないが村に1本の府道を往来に大型のトラックに危機感を感じているものが少なくない。「住めば都」というのがこれに対しては「そう思わざれをえない」とやや肯定した答えが帰ってくるが、その背後を探る必要がある。

2)の住環境について；

ほぼ60戸村内に家が立ち並んでいる。1戸あたり6,70坪の宅地に切り妻のトタン屋根の2階建（20戸）の1棟かこまの葺きあげと煙ぬきの破風の三角まどをもつ入り母屋がほぼ40戸ほどあり、別に隠居小屋兼なや1棟が隣接している。1戸平均のその母屋は凡そ40畳ほどの広さを持っている。やや子供たちが独立して老夫婦だけのいわゆるエンプティネストの家族では広すぎる感じがする。しかもその管理は大変なものであろうと察する。ではその住環境についてどんな感じを抱いているのだろうか。総じて「困ることはない」と住環境の不備を訴えてい

るものはない。ただし細かくみてみると村を流れる3本の河川（すでに砂防工事の完成している）には大水の心配やがけ崩れの不安やなど全くもっていないが、冬季の雪害の心配をしないものは皆無であるとともに高齢になればなるほどこの不安感は強い。その他、手洗いや台所の不便を感じているものの広さ、寒さなど心配していないとはやや肯定するものの割合が多い。むしろちょっとした修理を依頼する者が家族や近隣にいないことを憂いる者が少なくないのが老人世帯の共通した悩みようである。然しそうした住環境の快適さに反し潜在的な不安は家同士の密集からくる出火の心配である。たしかに過去の大火の経験を生かされて村落に数ヶ所防火施設を整えられているが、肝心の消し手がいなことの不安である。さらに住人の心を蝕んでいるのは村内に点在する放置されている人の住まなくなった廃屋であろう。かれらのなかにはこの状態がたまらなく辛いとつらいと嘆くものがある。同じ運命をたどらねばならない祖先への悔いであろうか。またはその罪悪感のためだろうか、尋ねてみるもののだれ1人としてもこのころのうちを明かしてはくれる者はない。

3) 就労とその意識；

ここに残った者は皆山や畠それに先祖の墓をすてることなく上世屋に踏み留まってきた者たちである。しかしその意識には大変複雑なものが存在するであろう。かつてこの土地を去った者たちに「卑怯者」とか「うらぎり」者さらには「捨て人」などと呼んできたがはたしてそれが本当だったのだろうかと考えない者はいないに違いない。それがこの就労の意識に投影しているようにも思われるからである。この意識はむしろ男性より女性のほうに鮮明である。男性にとっては村に踏み留まって墓を守りとうしたことは自己のアイデンティティに係わっているらしい。したがって離村者との比較からして在住者のほうがアイデンティティが強くかつその意識にははげしいものがある。しかし概して女性ではむしろ離村していった者のほうが勇氣ある者だと評価する者が少なくない。ただし地に生まれ地に育ち、地に踏みとどまった者は男性のそれに匹敵するほど似た意識をみせる。

これを除けばこれまで従事してきた仕事（山林労働、はたけ仕事、家事）に一応満足を感じている。とは言うものの農業の後継者のいなくなったことについてはいいしれぬ寂しさを持っているそうした諸々の負の条件を持ちながらも今尚現役でいわゆる仕事に携わっている。男性女性とわず自給できる米や野菜づくりなど畠仕事に精をだしている。その他収入を求めて村の生活体験教室に一役を担っている蕎麦づくりの原料そばづくりに女性は特産の山菜つみに、西陣織りや伝統技術の藤布おりなど積極的に働いている。一般に上世屋の女性は「はたらき者」の名で知られているが朝早くから夜遅くまで身をつめて身体を動かしてよく働く。しかも何がしかの収入をえる働きは彼女たちのアイデンティティの形成上おきな役割をはたしていることは間違いない。その1つが自立の意識でありかつおんなの意識の向上に役立っている。したがって仕事があり何がしかの収入をえている者とそうでない者との間には意識の大きな違いが明確である。とくに自治会活動や婦人会さらには多くの社会参加にその違いをみせている。ここでは過去のプレステイジなどあまり役に立っていない。健康で働けることがこの村でのステータスシンボルとなっている。但し、さきに述べたように村の活性化のため若者を他出させてしまった悔いとそれでいいのだという葛藤にこのころのさだまりをもちえないのが少々気になるころである。それに対して男性では一旦決心して決定したことへの悔いはないように思えるし「この土地の骨になる」ことへの指向は大変大きい。とくに他に離村してしまった者の村を思い村に骨を埋めることへの願いが強い。

4) それでは村の生活を仕切る自治会活動への意識はどうであろうか。

埋めることへの願いが強い。

5) それでは村の生活を仕切る自治会活動への意識はどうであろうか。

現在上世屋の自治会組織には農協会、婦人会、老人会、自営消防隊、世屋の里委員会、学校委員、おいせ講、お宮の仕事、週末休日委員会、村の体育大会、などなど各種組織され、活動しているがかつてのような活気はもはや見られな

い。第1それを担う者がいない。また年何回定期的な村の総会があるが出席率は今1つで協力が得られないと自治会長はもらしているが村民の意識にも大きな変化がみられるのではなからうか。

ではそうした自治会についての住民の意識であるが、やや「不満である」と答えた者が多い。その理由はまず「年をとっているのでお役ご免にしてほしい」というのが本音のようだ。原則として1世帯より1人代表で出席しなくてはならないが「忙しくて出られない」とか家の「仕事が多すぎる」などと雑事におわれて出席できないこと、余りに自治会の仕事が多すぎるなどその大きな理由としてあげている。若者の離村で人を失なった村では、その担い手を失ってしまって自治活動に支障をきたすほどである。したがって其れを仕切る者は以前として村の年寄り衆であり現役から開放されることがない。それに引き換え自治会への出席状況は「時々でている」程度である。それで村の自治組織の内一番のぞまれているのは道路、街灯などの設置や情報の伝達村の一斉休暇、その外親睦の順となっている。行政への要望としてはいろいろ在りそうだが「個人のことは無関心、つめたいのでめったに訴えたことはない」とやや否定的な答えが帰ってきた。どうやら「仲間と話す程度で村や市に願うことはしない」ようだ。

したがって村のなかには「なんでも打ち解けて話あえる仲間が」必要だが、残念ながら毎年村を去るか死にわかれてしまい孤立化が一層深刻化している。当然村のコミュニティーセンターの役割を満じてきた寺は廃れ村と同一視するシンボルをうしなっているため、講中などの寄り合いも極端に制限され交わりの機会の少ないのが寂しく写っている。

6)消費動向について

おおかたの食料、雑貨などの生活必需品の購買は村にくる行商で充足している。家のなかには可なりのもが電化しており冷蔵庫から洗濯機にいたるまで備わっている。これらは子供たちから送られてくるものであろうが、やや持て余しきみなきらいがある。むしろ使いこなせないまま放置されている電機製品が多数ある。「こ

こ半年のうち映画、音楽会、演劇など鑑賞、観測した娯楽の有無」を尋ねたが皆無である。

専ら娯楽は家庭にあるテレビが主で、わざわざ宮津までバス（因みにバス代往復2,000円）を使って行くことはない。さりとて老人会などで計画されるもよしものにも参加していないと答える者が少なくない。プログラムはもとより社会参加への意欲に欠けたところがある。唯一〇きよこ姉が月に一度宮津に老人大学に参加しているのみである。とくにこの社会的機会に恵まれていないことが問題ではないかとさえ考えるのだが、むしろ、そうしたゆとりさえ持ちえないことの方が問題である。日常機を織る婦人たちは一日中ラジオを聞いているし、野良に出ている婦人たちも腰に携帯用のラジオを話さない。概してマスコミへの接触は密でニュースを聞き、あらゆる情報に詳しいことがそれでわかるであろう、新聞の購読は20人中半数ある。毎日、朝日、読売、サンケイ、その他農業新聞や聖教新聞と、またその3分の1が「家の光」を愛読していることがわかるが活字ばなれをしていないのが分かる。したがって、世のなかの出来事には敏感である。現内閣のうち数人の大臣の名前を間違いなくあげることができる。最近起きた出来事にも精通している。購買で最近買ったものを聞いてみたが何もでてこなかった。また買いたいものと聞いてみると除雪機（屋根の雪降ろし機の意味）と冗談がとびでてくるほどその他は間に合っているという答えがかえってくる。むしろ将来に向かって墓地と墓石を買う為にながしかの蓄えをしているのだと郵便通帳を見せてくれる婦人がおり村では一種のブームになっている。

7)健康・医療について；

この作人は平均身長150、体重4,50キロとやや小柄でやせ方の老人が多い。年の割りには元気で敏捷に身をこなしているのが特徴的である。概して健康状態を聞くと「多少心はそいが、まあなんとかやっつけていける」と答えた者が大半を占めている。さらに細かく見てみると現在治療中の病気には男女ともに大した差はなく、1人平均5〜6つほど治療を必要としている病気をもっている。その中には高血圧、心臓

病、リュウマチス(神経痛)、胃腸病の順となっている。とくにガンなどの心配をしている者は2名を除く他はみられなかった。したがって普段から自分の健康には十分気を使っており栄養剤の使用、栄養に、睡眠時間、衛生、酒タバコなどのしこうをとくに気配りをして健康管理に努めている。感心したのは塩分の摂取量についても十分な学習の効果がでていることと栄養のバランスを考えて保健所の指導により余り好きでなかった牛乳の飲料が徹底してきたことを挙げることができる。その他健康問題に関する行政への要望は高く保健所の強化、山間 僻地の医師の派遣などを強く要望していることが分かる。

この健康問題でもっとも恐れているものは老人ボケと悪性腫瘍である。これは村に残るものは健康以外に無いと考えているからだろうか。

8)その他；

生きがいについて—3分2を越したものは「楽しみをもって楽しく生きること」「金に不足なく生活できる人」「丈夫で一日はたらける人」「働いて自活できる人」、さらに3分1は仲間と楽しく仲間入りできる人」「自分の意見を持っている人」3分の1以下には「夫婦、家族揃って生活できる人」「一日中好きなテレビをみていられる人」「信仰のもてる人」となっている。また別の項目では国や社会のために役立つ人より近隣の人々に役立っているとき、イエでテレビをみている人より仕事や勉強に打ちこんでいるとき、仲間といっしょに談笑している時より家族とともにいる時、善行を人前でみせるより一目につかないように善行をした時に感じる自己のアイデンティティーの意識であることがよくでている。

9)我々の調査の結果

上世屋村の人々には、未だに過疎の引きがねとなった豪雪が、根強く忘れがたい事実として、心に残っていることが判明した。

この豪雪は、村民の心に山間の村での生活の不便さや、それゆえの貧困のつらさを思い知らしめることとなった。

この点から推測できる結果として、村民は、実質的な現金収入を得る方向へと走った。それ

は、手機であり、営林署であり、即効性のもとめられない過疎対策を敬遠することにもなった。貧困の切実なつらさを、体験した者にとって、それは、しかたのないことであろう。

しかし、こうした現金大歓迎的な思考は、現在も生きている。家族村の建設に対し、上世屋村の人々は、協力的ではないと非難されている。センターなどを作るにあたっては一部の役員は文字通り東奔西走したが、当の上世屋村の人々はその体験実習センターを冷視している。なぜなら、彼等には、営林署も手機もあり、金銭的には、不自由していない。「センターに熱中することはムダ」と思っている。

これは、センターを非難するものではない。漠然とした無関心が、彼等の心にあるのだ。無関心に裏打ちされた諦め、放任感。利益を即効的にもたらさない物への無関心。これらの中で当事者の家族旅行村、体験実習館への希望は、乏しい。

2. 老人の意識と生活(2)

人口減少の終局点、負の条件、ネガティブの変化過程。

1) 人口減少の終局点

〔現象〕	〔意識〕	〔備考〕
人が減った	寂しい 人がいない 村にわかものが居ない	若者を追い出した仕組みがにくい 大火災がこわい
人が急に減った	一時どうなるのか心配だった 一時期さびしかったがすぐになれるものだ 人気のない村(ゴーストタウン) 村がなくなるのではないかと心配に成った	意外なことに人がのこったそれはなにか? 異常な世界に住んでいるなんとも活気がない
子供がいない	人口や社会のバランスを欠く	アンバランス
老人が残る	むらのにぎやかさを失う ばあちゃん世界 村の衰退、消滅	おちつきのある社会 結構老人ばかりでも村のバランスはたもてるもの 自分の代でなくすのは残念、先祖に申し訳がない

〔現象〕	〔意識〕	〔備考〕
		自分のせいではない どうすることも出来ないの歯が痒い
経済活動のさびれ	村の活力、活気がない、村の中心的な仕事、農山林業がない、これは死んだ村、いざという時心配だ金がない	貧しい村から暗い村
人との交流がない	人の結び目を失った 仲のよい友を失った悲しみ 話の相手がいない 村人との接触の機会が少なくなった 楽しいことがない	ころぼそいい
ロ) 負の条件		
大雪以外心配はない		人口の減少の終局点が悪化しなくなった
すぐに助けてくれる者がいない	ころぼそい限りだ	
生活の第1次的防衛機能の喪失	警察官・消防士不在	
村の行事を失う		
子との接触がない	つらい 自分が選んだのだから我慢	
交通の不便	社会参加のマイナス	
仕事がない		
多忙	みんな忙しい	仕事の手をやめるのは悪い
村の仕事が出来ない		金で償えない
自分の老いはマイナス、ハンディキャップ		
ハ) 変化のプロセス		
むらの消滅につながるのではない	活気がなくなった、人がへったら村でなくなる	
人口減	若者がいない老人ばかりの村になってしまう こどもの数が減ってしまう なかまが一人二人といなくな(むらを去る)なる 一気に離村者がでるのではないかとさびしい 残るのはじじとばばだけ—これじゃ村にならぬ結局むらは消えてしまう 人のところがばらばらになってしまう バスや交通がますます不便になるのではない 互いの付き合いがなくなってしまう やむをえない、第一人がおらなんではこうなる運命にあったのではない それにしても残念なことだ	

〔現象〕	〔意識〕
自治組織の崩壊	自治会組織が廃るのではないかな 重要な役員さんがいなくなる 自治区としての活動が制限されるのではないかな 重要な役割を担う若者がいない(消防・防犯) 区長がなんでもかんでもやらねばならないのでむらを支えてきた要がみんななくなってしまふ じじとばばでは役がおいきれない 各戸の割り当て(仕事)が増える 忙しい上に人手がとられては困る
村の産業がすたるのではない	田や畠がある 山の仕事ができなくなる 収入の得られる仕事がない
先祖の残してくれた土地	守らねばならない 絶対そんなことをする村人はいまい 裏切り者をこの村から一人も出したい
これまで苦労して村を支えてきたことはなにか	
市や県でやろうとしている過疎対策	住民が残れる施策をしてくれるだろうか 結局行政もわれわれをみすてるだろう 第一われわれのことを行政は考えてはくれない われわれには事の一切がわからん 観光反対、若者が村にのこるようによよそものが入ってくるのは困る 子供たちが帰ってくるような産業をおこせ 観光なんて甘いことで村おとしが出来るわけがない 皆が力をあわせてもこれは(過疎)はだめ 先祖と村人を支えた寺がなくなつては？ 村人の心にかよっていた信仰心がなくなる 墓を下におろすのはどうかと思う 最後まで寺の住職にはいてほしい だれが先祖の供養をするのか ひどいうちではないか、村をすてて出るとは 親類同士の縁がゆるむのでは 老後のことが心配でたまらん その他
	親類だけでも結束して村にとだまらねば たのみの綱は結局親類では 金、けが、家事、(3K)がこわい 年をとったら大雪が心配 雪がなかったらどうにかやっていけるのではないぞというとき心配になるだろう だれに助けてもらったらいいのか お医者さんにきてくれるだろうか 人口のようにいっぺんにへるのはいいがすこしずつすこしへっていくのはたまらん 開発などせずこのままあるにまかせておいてくれ

自分の代で村をつぶすのがくは止めてほしい
せめてこの苦しみだけはあとに残った者たちに残しておいてやりたい(村の衰退記をつくりたい)
村ここの(朽ちゆく)姿を人に見せたくない

3. 調査結果

木子地区の入植者の場合

(グラビアに載った木子の村づくり)

高度成長以後、日本も低成長期に入り、長い不況が続いて経済や社会の基調も変わってくると、価値観や行動様式など文化構造も変わってきた。都市では新しいライフスタイルを求め、農村に移住する動きも出てきている。ここでは、木子地区の入植者の事例を紹介する(グラビア参照)。

〈事例1〉

M. N氏が木子地区に入植したのは13年前の昭和48年頃である。入植するきっかけとなったのは偶然にも友人が、この近くに住んでいてここに来て「仏像を彫ってみないか」という誘いがかけられたことにはじまる。本格的に村に入るまで一冬ここで生活し入植を決断した。仏像を彫刻する環境になかったからだという。したがって目的も、専ら仏像を彫るためで、入植したての頃、木子地区には沢山の廃屋が建ち並び、まだ5世帯ほど住民が残っていた。木子には最初に入植し、村の人達から色々なことを教えてもらった。そして住民と山仕事を共にした。

現在、家族は4人、再婚した妻の間に、3歳になる長男と1歳の二男がいる。家は、家族が生活する家が一軒、作業場が二軒ある。二畝ほどの畑にも自給の野菜を作っている。冬期には、スノーモービルで郵便配達のアルバイトもする。

しかし将来も、ここに住む訳ではない。またこの付近に新天地を求めようと思っている。木子には長い間、大変お世話になった。もちろん嫌な事も沢山あったが、木子の良さを一番よく知っているだけで充分である。今の木子は、本当の木子ではない。

〈事例2〉

木子地区で牧畜を営むN. Y氏は、もともと宮津市の出身者である。昭和45年、宮津市市役所や上世屋の友人の紹介で木子を尋ねた。入植は、ほぼ時期に決めた。47年には地域住民と本格的な土地交渉に入り、翌48年には近くの上世屋地区で畑を耕作するなど、村の中に入る努力をした。その努力の甲斐もあって、住民の信頼が得られ、土地の交渉もスムーズに運んだ。今の牧畜をやり始めたのは49年4月からである。

現在、8ヘクタールの土地に牧場を営み、肉牛を中心に豚・鶏などの飼育をしている。牧場には家族の他に3人の実習生が働いており、経営もうまくいっている。

最近では、今の現状が少しでも良くなるようにと、牧場を中心に「チロリン村」というミニ独立国にも力を入れる。「チロリン村」は人間と動物・植物の本来の生き方を求めて、をモットーに、和牛肉や手作りロースハム、世屋の特産品を宅配便で届け、特産品を通じて世屋を知ってもらおうことを目的としている。

こうした村の振興に励む氏が入植して、意識の上で変わってきたのは、都会と田舎との両面を観ることができるようになったことである。

〈事例3〉

U. K氏が木子に入植したのは、8年前の昭和53年のことである。入植するまで全国を旅していて偶然に当たった所が木子であった。当時、地区には空家があり、田畑を貸してくれるということで住みつくことになった。それから半年遅れてK. S氏が加わり、二人になる。K. S氏は自然に生きる道を求め、旅をしていてU. K氏と知りあい、二人はそこで師弟の関係になった。両氏とも独身で家族はない。

現在、田を四反と畑を一反五畝借り、有機農法をし、完全に自給自足の生活を続けている。生活も徹底して自然を貫き、テレビもなければ自動車もない。特別に必要なものがある場合に限り、近所の人に頼むことはあるが、通常買物はしない。K. S氏は百姓仕事の合間に小説を書いている。

〈事例4〉

木子地区に入植するまで東京でテレビ関係のプロダクションに入り、テレビ用ビデオの編集

第 7 表 世 帯 調 査 (上 世 帯)

世帯 番号	現家族員	性別	満年齢	職 業		宗 教	教 養	他家 世帯 との 関係	出 身 主 柄	年 齢	学 歴	職 業		従 業 先	他 出 先	他 出 の 理 由	備 考
				仕 事	地 位							仕事内容	地位				
1	世帯主 妻	男女	69 65	農 業	自 営	臨濟宗 (慈源寺)	聖教新聞	長二 三三	男男 男男	37 33 29	大卒 大卒 卒卒	警 備	雇用者 雇用者	旺聖教新聞 ガソリンスタンド	東京都 京都市 東宮津	高卒後進学 進学就職	世帯主営林署退職
2	世帯主	女	79			"	念 法	長二 三三	男男 男男	57 53 50 43 46 39	大卒 大卒 短大 専大 卒卒	獣 医 主 婦 警察官 教諭	雇用者 雇用者 雇用者	電 気 屋 織 維 会 社 京 愛 知 県 教 員	京都市 京都市 京都市 京都市 京都市 京都市	進学進学 進学進学 進学進学	死 別 夫の恩給・年金
3	世帯主 妻 長男	男女男	57 59 30	営林署 手 機	雇用者 (内) 雇用者	"	農業新聞 毎日新聞	長二	女男	32 28	高卒 大卒		雇用者		岩 滝 町 府	結 婚 学	
4	世帯主 妻	男女	65 61	農 業	自 営	"	京都新聞 家の光	長二 三三	女女 男男	34 32 28		看護婦 保 母	雇用者 "		京 都 市 京 都 市 京 都 市	就 職 "	
5	世帯主 妻 長男 母	男女男女	16 12 72	営林署	雇用者	不 明	毎日新聞	長二 三三	女女 男男								世帯主離婚?
6	世帯主 妻 長男 母	男女男女	59 57 24 83	営林署 手 機	雇用者 (内) "	臨濟宗 (")	読売新聞 家の光	な し									世帯主養子
7	世帯主 妻 父	男女男	62 58 86	農 業 手 機	自 営 雇用者(内)	"	読売新聞 農業新聞 家の光	長二 三三	男男 女女	36 34 30	高卒 高卒 大卒	主 婦 主 務 員	自 営 雇用者	ガソリンスタンド 京 都 府 警	京 都 市 福 知 山 市 京 都 市	就 職 "・就職 進学・就職	世帯主区長 父 営林署退職 父 隠居
8	世帯主	男	65?			カトリッ ク		長二 三三	男男 女女 女女								生活保護 調査不能
9	世帯主 ?	女	86			臨濟宗 (")		長二 三三	女女 男男						宮津市 吉津		生活保護?
10	世帯主 妻	男女	52 53	営林署 手 機	雇用者 (内)	"	京都新聞 家の光	長二 三三	男男 女女	28 25	大卒 短大 卒卒	教 諭 販 売 員	雇用者 "	京 都 府 教 員 ワコー(大丸)	京 都 市 "	進学・就職	
11	世帯主	女	57	手 機	雇用者(内)	"	毎日新聞 家の光	長二 三三	男男 女女	34 31 28	大卒 高卒 大卒	主 婦 家 族 員	雇用者 雇用者 雇用者	建 設 業 電 気 関 係 業	大 阪 府 京 都 市 京 都 市	進 校 進 学 進 学 進 学	
12	世帯主	女	56	手 機	雇用者 (内)	臨濟宗	聖教新聞 家の光	長二 三三 四	女女 女女 女女	35 30 28 26	高卒 " 卒 短大	ハハ主 タタ保	雇用者 雇用者 雇用者	ダイケイ 産 業	岩 滝 町 府 京 都 市 京 都 市	就 職 "	死 別(夫)

[illegible]

プロデューサーをしていた。木子を知る契機となったのは、大学を卒業し、二年ほど業界誌の新聞記者をしていた頃のことである。友人に百姓をやりたい都会人がいて、彼が学年の頃、長野県のべやまで園農のアルバイトをしていた。そこに偶然、友人がこちら出身の人と出会い、その友人に付き合ってきたのが初めである。

最初に来た昭和53年に実際に米や野菜を作ったりして一年間過ごした。その後、帰ってテレビ用ビデオの演出の仕事をやっていたが、週一の作品（ニュース番組）を製作するのに週三日ほど全国をまわる、すごい仕事の量だった。しかし演出の仕事というのは、一種の消耗品で、スポイルされるのも早い。毎日が徹夜の仕事で、この先何十年も続く訳がない。そういう所で、こんな生活をしていたら未来にとって、やばいと感じた。

都会の生活には、今の豊かさ・快適さが永遠に続くというような雰囲気がある。だからといって、こんな豊かさ・快適さがいつ変わるかという不安は、無意識のうちに誰でも持っているのではないか。都会で生活していて、常に将来に対する漠然とした不安があった。それに大きな会社に入って、一生ホワイトカラーで安泰に過ごすということに幻想を持てなかった。私が楽天主義なのからではないが、「どうせ自分の一生なのだから好きなように生きていこう。」ということで、三年前（昭和58年）に入植に踏みきった。

現在、家族は5人で、妻と小学一年の長男を筆頭に三人の子供がいる。畑も五畝ほどあって、有機農法で自給する分の野菜を作っている。

昔、プロデューサーをしていた関係で、
今もビデオ撮りのアルバイトをする。今年
も二本、ビデオを完成させた。

これまで都会では天気予報など見なくてもいい生活を送っていたが、ここは「ウラニシ」といって毎日のように雨が降る。日本海側の気候の過酷さに驚きを持つとともに

に、体で知っていくことは、すばらしい。こんな所で生活すると、人間の精神とか感性にも影響して、発想も違ってくる。都会との双方を体験できて意識の上でも変わってきた。

けれども、ここにずっと住んでいこうとは思わない。ここが終点ではなく、通過点に過ぎない。そのくらい自由であってもよいと思う。

〈事例5〉

木子地区に入植したのは、二年前の昭和59年のことである。中学時代から山が好きで将来、山の中で生活したいという希望を持っていた。木子へは、大学4年の春に大学の友達（加悦町出身）の家に遊びに行ったことから始まる。その時、友達に連れて行って貰い知るようになった。以後、何度か訪れ、村の人と酒を飲んだこともある。入植を決めたのは大学卒業後である。また入植にあたり、今の妻の家族が理解し賛成してくれたことは大きかった。妻（大学時代、同じ研究室に所属）とは、去年の9月に村の人達の協力で、野外で結婚式を挙げた。

現在、妻と二人で生活している。宅地の他に畑を一反ほど借り、大根や自給の野菜をつくる。それに去年から上世屋財産区の山林を二町歩借りて、しいたけ栽培も始めた。しいたけ栽培による収入は、まだ少ないが、来年の春には本格的に出荷できるようになっている。今のところ収入の大半はアパートによる収入で、送金して貰っている。今後共、木子に住むつもりである。今では山の生活は、ぜいたくな生活だと思っている。

〈事例6〉

木子地区へは2年前の昭和59年頃、牧場を経営するN.Y氏の紹介で知ようになり入植した。入植する前は、神奈川県の鎌倉市に住んでいた。夫（U.N氏）は、そこで高校の非常勤講師をしながら、ある劇団で音楽を教えていた。木子への入植は、子供の教育のことを考えてのことである。

今、家族は預かっている子供を含めて7人おり、子供は4人いる。子供は上から高校2年の長女、中学3年の長男、2年の次男、3歳になる次女の4人である。

入植後、山羊の飼育と自給自足のために土地

を買った。今、家の方は製作中であるが家は自宅であると共にペンションにする計画である。自分の家で消費するものは、自分達で賄っているように思っている。

〈事例7〉

夜間高校の先生であったU.N氏の教え子にあたり、それが縁で木子地区に住むようになった。現在地区のスクールバスの運転手をしている。

次に、入植者の家族調査結果をみていこう。この第8表で注目されることは、一世帯を除く全ての世帯が夫婦共に大学を卒業しており、学歴が高いことである。しかし、年収（過去1年間）は一般に低い。入植前は700～800万円台の収入があったが、入植後100万円未満になっている事例さえみられる。これは農業収入に依する限り高い収入が得られないことではなく、むしろ入植者達が努めて自然の中で新しいライフスタイルを愛好していることを示す。つまり高収入といった経済的要因よりも、生活の質という非経済的要因の方が重要な意味を持つということなのである。農業、化学肥料を使わない有機農業で自給自足をし、健康で親密な家庭生活を送ることが彼らの志向する生き方になっている。そして無宗教が多いことも、彼らが進歩的な考え方を持っているからかも知れない。なお、こうしたことは上世屋地区の住民から言わせると「収入がないのに、こんな所に来て変だ。何をして暮らしているのだろう。」という声にもなっている。（文責 菅原）

4. 離村者の意識

離村者の文集や聴取調査の結果から、挙家離村によって解決を図ろうとした問題は何であったかそれを考察することにする。

4-1 きき取り調査から

1) 村仕事上の問題

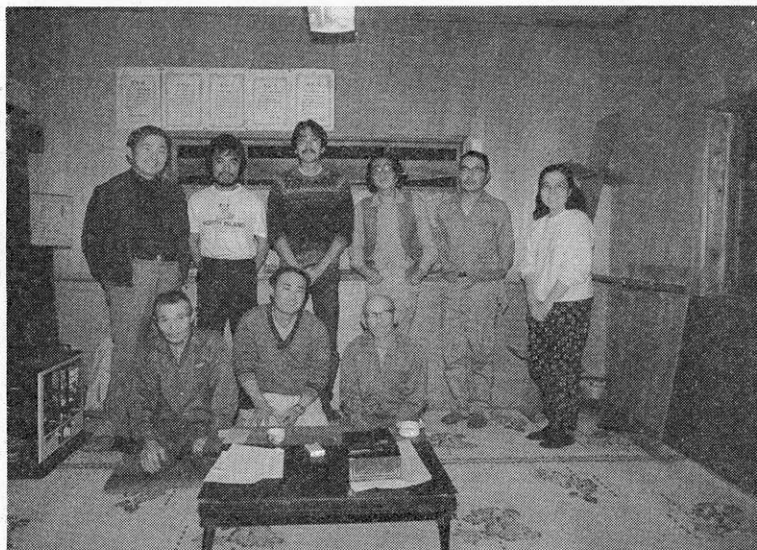
僻地山村に行政上の手が差し延べられることが少なく、学校・道路・農道の建設や補修あるいは災害の復旧の全ては、村仕事の名目でなされたのである。これは村の生活維持のためには不可欠な作業であったが、夫役は住民にとって

「新・田舎人」の 村づくり、夢づくり

(1986. 6. 27)

—京都府・丹後半島の過疎村に七世帯が入村—

丹後半島の過疎村、宮津市の木子地区はかつて50戸



新村民と旧村民(前列の左右の2人)の比率が逆転していれば都会から来た人たちに過疎村が乗とられた形。寄り合いの雑談には東京の話題が尽きなかったりして……。

ホトケもついに身売りの過疎村

京都府北部、日本海につき出た丹後半島の秘境・木子地区(宮津市)は標高 500 メートルの山中にある。真夏でも涼しく、冬には 2,3 メートルの積雪に埋もれる過疎村だ。

自然がいっぱいのすばり型高原という環境状況だけに、それなりに住みやすく、かつては住民 50 数戸を数えた。1950 年代に大火にあい、63 年には豪雪。このあとの時期は高度成長が波が村にも押し寄せ、出稼ぎが多くなる。後継ぎの長男は都会に出るようになった。寒い土地柄だけに田畑にたよる自足生活が破壊され、村民たちは櫛の歯が欠けるように村を出ていった。ただいま、旧村民二世帯。60 代と 70 代の老人夫婦が悪くいえば村に取り残された。そして、今年の春、ついに村唯一の仏寺が宮津市の方に買い取られていった。仏も身を売った過疎の村……。何やら悲惨に思えるが、そうでもない。このところ一大異変が起こりつつある。

宮津市の医者の子で、大学は東京の玉川大学と日本獣医畜産大学を出た西原靖重さん(38)がこの木子地区に入ったのは 13 年前。村には十数戸が生活の煙を山

を超える集落であった。そして過疎村としての推移をたどる。つまり、厳しい自然、高度成長経済にまき込まれた農村の悲劇、後継ぎがいなくなり、少しずつ歯の抜けるようにさびれていった。そこへ新村民が現れる。はじめはいそいそと農・畜産の振興を志して。そして、都会を脱出した新・田舎人たち

……。いまや旧村民二世帯に対して新村民は 7 世帯にも増えて完全に村の主導権は逆転してしまった。

過疎の村に都会の風が吹くのは悪いことではない。自然との共生、農的暮らしの新展開は、近代性のワナにかかって消費の構造におとしいれられた、いわゆるプロの農業人にはかなわぬ望みかもしれない。

とはいえ、「村は死んだ」とつぶやく旧村民のことは重みがある。木子地区はどこへ行くのか。新村民の村づくりと夢づくりが交錯して、全国でも珍しい新・旧村民逆転の木子村は注目をあびていま……。



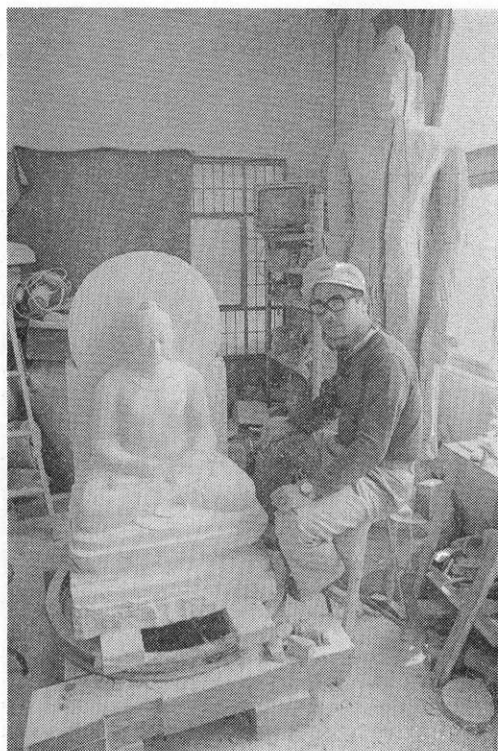
① 丹後の宮津市出身の西原さん一家は 13 年前に入村。電気も通わない山の斜面に牧場を開拓していまや立派な肉牛の牧場主となった。西原さんを中心に新村民と旧村民が力を合わせて村づくりに励む。

中の薄もやに立ちのぼらせていた。西原さんは木子の集落からちょっと奥まった山の斜面に牧草地を買い求め、牧畜を始めた。

集落から1キロほど離れているため電気がなかった。長いロウソクでの生活、子どもが2人この間に生まれ、育ち、やっと電話に灯が西原家にともったのは2年前のことだ。そして8ヘクタールの土地に肉牛を飼い、やっと牧畜も軌道に乗りつつあり、京都府の中では、放し飼い飼育による良質の牛の産地として定着しつつある。

根っからの動物好き、自然との共生感をもつ人だった。彼は村の中につとめて入る努力を続けて、村民からの信頼を得た人でもあった。

同じころに村に入ったのが、丸橋直継さん^②だ。東京芸術大学を出て、そのあと放浪の旅に。とくにインドでの旅は長かった。60年代から70年代にかけての時期は、政治的な激動からもの憂い生活へと移り変わる時期であった。丸橋さんは仏と出会い、日本山妙法寺の門徒になる。そして仏像を刻み始めたのがここ木



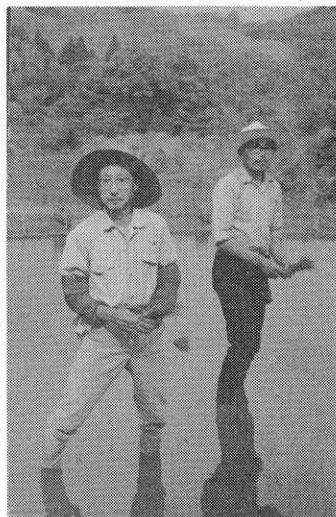
② 丸橋直継さん。かつてインドを放浪して行きついたところが丹後の木子地区。13年前に入って仏像を彫りつづける。いま子ども2人の4人家族。暇なとき田畑を耕す。新村民が増えて最近では仏像を彫る環境が薄れているのが悩み。

子地区に入ってからだった。いや彫るためにこの過疎村にやってきた。最初の十年間ほどは、自らの揺れ動く心を静めるかのように、ひたする苦行する仏を彫りつづけた。穏やかな表情をした菩薩像を彫り始めたのは2、3年温からのこと。

田畑を耕し、できるだけ自給しながら仏像を彫り続ける日々の丸橋さん。子ども2人と奥さんの4人生活。過疎の村で穏やかな心を取り戻した。

8年ほど前にもうひと組の異色はカップルが村に入ってきた加沢真一さん(59)と梅木良彦さん(39)。師弟関係の2人だ。

加沢さんは若いころに都会で働いていたが、もって生まれた生理が都会での生活に合わず、自然に生きる道を求めて全国をあちこちと捜しまわった。定着する場所と思っても自然環境と人間関係が加沢さんの生理をおびやかした。途中知り合った梅木さんは加沢さんの自然道と



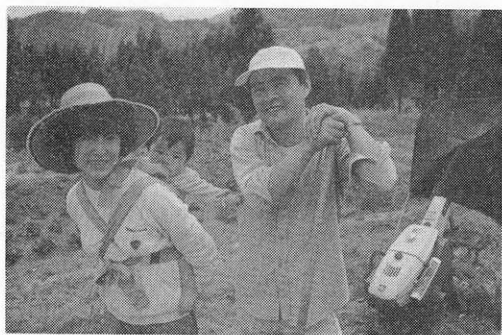
共に生きる決心をして弟子に。2人はこの地区に住みついて昔ながら自然農法で3反余の水田と自足だけの田畑を耕して生きる。現金支出は健康保険料と電気代、月にして約5000円だけという徹底ぶり。

過疎の村に未来はある?!

加沢さん師弟と丸橋さんは過疎だからこそ村に入ってきた人たちだ。

そこへこの3、4年の間に4世帯が東京方面から入ってきた。

齊木日出夫さん^④一家。業界雑誌記者からテレビ用ビデオの編集プロデューサー。大都会の中でも花形のカタカナ商売。その裏では昨日のことでさえ忘れてしまうくらいの多忙さと精神的スポイルがあった。「自由に生きたい」と初めはカッコよく考え、4年前に木子へやってきた。村の日常に考えるほどカッコよくはなかったが、ほどほどに自給のための畑を耕し、町に出てはビデオ撮りのアルバイト。無農薬の畑づく



- ④ 齊木日出夫さんの家族は入村して4年目。子ども3人の5人家族で東京での生活から脱け出した。毎日、宮津市へ出て昔とったキネヅカとやらでビデオ撮りのアルバイトで現金収入を得ながら野菜を育て自給の道を広げている。

りはていねいで村でも定評があるのは山梨県の農家出身だからだ。

⑤ 福島康高さん(29)が入ったのは2年前。東京生まれで弘前大学出身。廃村めぐりをしているうちに丸橋さんと出会い、この地区にやってきた。1年半ほど前に



- ⑤ 福島康高・淳子さん夫婦。まだ20代の心やさしき若者だ。ふたりとも東京育ちで弘前大学の出身者。シイタケ栽培と少しの田畑耕作でのんびりした毎日。生計の方はまだ成り立たずに東京からの仕送りしてもらっている。いま親は田舎からでなくて田舎へ仕送りする時代？

親に面倒をかけて1千万円近い金でペンション風の家を建て(土地は借地)、昨年同窓の淳子さん(25)とこの木子の村で初の野外結婚式をあげたばかり。シイタケ栽培を主にしながらの田舎暮らしだが、まだどちらの親からも仕送りの生活。心やさしき青年夫婦はこの村にやってくる春の感動がたまらなく好きだという。

⑥ 宇都宮直さん(42)一家は、1年前に木子から山ひとつ下った下世屋地区に入り、現在、木子に来て丸太小屋づくに励んでいる。神奈川県の高校の非常勤講師を勤めながら劇団の音楽担当で活躍していた。

「現在の教育は人間をダメにするばかり。とくに神奈川方式の高校入学の選抜制度にたまらなくなり、自然の中で子どもと生きるのが一番」といって木子地区にやってきた。

丸太小屋は自宅であると同時に都会に住む仲間たちとの共同ペンションとしているんな文化活動の場にしたいと夢を語る。



- ⑥ 木子地区より山をひとつ下ったところにある上世屋地区に3年前から入っている森幸夫さんの家族。公民館に住まわせてもらって、村民との交流もうまくいった。畑を耕し、山林から木材切り出しのアルバイトで日銭をかせぐ。将来は草木染の糸で織り物をやりたいと、こつこつ準備をすすめている。大阪生まれ。鎌倉で6年間新聞配達をしたあとの入村だった。

むろん畑を耕し、ヤギを飼う生活のために土地も買った。純百姓になるのは難しい。この地に人間らしい文化の拠点を。夢は果てしない。高校1年の娘さんを頭に5人の子どもと奥さん、それにかつての教え子だった清水威夫さん（24＝独身）が住みついた。

正確に言えば、6世帯と1人の独身青年がこうして木子地区に入って村はがぜん、活気を帯びてきた。

自然農法に生きる加沢さん、梅木さんの師弟を除け

ば、みんな都会の顔つきは隠せない。村の寄り合いをのぞかせてもらおうと、雑談は村の話のあとは東京の話題になった。むろん、それぞれの事情があり都会を脱出してきた新田舎人である。だが土にふれ、自然と生き、それぞれの夢づくり、胸の内に秘めている新田舎人たちだ。全国でも珍しい新・旧逆転の村は、いまやひとつの実験の場である。そこには農的暮らしと過疎村の未来がかかっている。

第 8 表 入植者の世帯調査（木子地区）

（昭和61年11月1日現在）

事例 番号	家族員	満 年齢	最終学歴	主な職業	年 収		現在地 での居 住年数	前 住 地	住居	宗教	備 考
					過 去 一年間	入植前					
1	世帯主 妻 長男 二男	44 45 3 1	大 卒 大 卒	彫 刻 主 婦	100～ 200万 円未満		13	神奈川県 葉 山	自家	日本山 妙法寺	東京芸大卒（世帯主） 畑2畝
2	世帯主 妻 長男 二男	39 38 11 9	大 卒 大 卒	農業(牧畜) 小学校教諭	1200万 円		13	宮津市内	自家	なし	牧草地8ha 肉牛70頭
3	世帯主 同居人	39 58	高 卒 旧中卒	農業(自給) "	100万 円未満		8 8	大阪府堺市 埼玉県毛呂 山町	借家	なし	両方、男性（独身） 田4反（借） 畑1反5畝（借）
4	世帯主 妻 長男 二男 三男	37 37 6 4 1	大 卒 大 卒	農業(自給) (主、映像 のアルバ イト)	100万 円未満	700～ 800万 円	3	東 京 都 武蔵野市	借家	なし	入植前、編集プロデューサー、 木子地区区長 畑5畝（借）
5	世帯主 妻	29 25	大 卒 大 卒	農 業	300～ 400万 円		2	東 京 都	自家	なし	しいたけ栽培2町歩(上世屋借) 畑1反（借） 昨年、現住地で結婚
6	世帯主 妻 長女 長男 二男 二女 同居人	41 40 16 15 14 3 17	大 卒 大 卒	農業(自給)	100万 円未満		1	神奈川県 鎌倉市	自家 (製作 中)	なし	1000万円の費用かけ自宅兼 ペンション製作中 同居人(女)高校2年 ヤギ1頭
7		24	?	アルバイト				神奈川県	なし		スクールバスの運転手 事例6の世帯主の教え子 独身(男)

相当な負担になっていたことは事実である。後に挙家離村は、これを理由とするものが多い。

それには、

①2人家族の家も8人家族の家も、また固有資産の大小にも所得にも関係なく、一戸当たり一人であったこと。

②村(総)仕事がいくらでもあり、これらは無報酬でなければならなかったこと。

が挙げられる。要するに、世帯員の少ない家族でも夫役は一人と義務づけられており、これが不公平であったからである。しかも不役(出役)中はこの仕事は出来ず、負担に絶えきれない面が多々あった。それに村仕事は村の公共施設の全てに及ぶため、不役は絶えない。こうした

住民の重い負担が「こんな村とは、もうつき合
いできない！」という結論を出すに至ったので
あろう。しかし、その背景には個人主義的な価値観・合理主義・他市町村との比較、推量があったことは否めない。

ロ) 教育上の問題

昭和36年頃、木子・駒倉の児童は、朝早く起きて4キロ程の道のりを徒歩で上世屋まで通学した。他方、下世屋・松尾・東野の子供は、日置中学まで通学していたという。また学費よりも下宿代の費用の方がかかるなどで、高校に進学させられない家庭が多かったとも聞く。

学力があっても進学させられない事情は、教育熱の高まりと共に教育機会の不平等を認識さ

せる結果となっている。これも挙家離村の大きな理由の一つになった。

ハ) 役職上の問題

ここでは役職上の問題とは、村の最高幹部である区長のことを意味する。

区長は年間 150 日も村の事務に関する仕事があり、大方は無報酬になっていた。後に挙家離村によって世帯数が減少すると、有能な人物もいなくなり、区長も順番制になる。ところが区長になっても、区費の納金が出来ないためこれ

第 9-1 表 挙家離村者の意識の原因
(野田川町転入者談)

農 家	理 由
1'	家が全焼。
2'	農村では生活水準(特に食生活)を上げ得ない。
3'	農業経営だけでは生活できない。子弟の教育のために平坦部に出た方がよい。
4'	挙家離村が多く出て、村仕事の負担が増し、老人のために堪えられない。親類も皆出てしまった。
5'	子供が村にいたくない。老人で村仕事ができない。農業収益があがらない。親類が出て淋しくなった。
6'	部落役職が増え、ために農業はできず、女たちが不平をいう。
7'	息子の結婚相手がいない。弟が説得した。学校が不便。大雪がこたえた。
8'	表具師として独立しようと思う。役職が多くて困る。子供の教育ができない。
9'	離村中の二男の死亡(看護もできず)。農業の将来性がない。長男が出稼で家をあげるのを嫌がる。家族が同じ所で暮したい。
10'	火災にあい、生活不可となる。
11'	農業だけでは生活できない。夫の出稼ぎで家庭生活が不安定。
12'	義兄の離村に伴う(保護者)。
13'	農業後継者なし。子供就職後別居し、不便。
14'	子供に嫁がみつからない。とにかく将来性がない。
15'	生活が不便。農業の将来性がない。離村中の弟妹たちが勧誘。大雪で生活の危機を感じる。
16'	長男の仕事は村ではない。
17'	子供が学校に通うのに友達がいらない。生活が困難。大雪がこたえた。「所得格差」の話がこたえた。
18'	将来のことを思って真剣に考えた。
19'	将来は現状維持で精一杯、子供の教育のことを考えると離村は必至。
20'	大雪のため家屋の修理もできないし、学校にも通えない。生活が苦しい。
21'	現金収入が少い。子供の教育のために。

(注) 「農家労働力移動と農業構造変化に関する研究」より。

を苦に区長職を忌避したり、離村の理由ともなっていた。

以上の離村理由から、その根底には「自村では、社会的恩恵が少なく損である。」という考えかたに貫ぬかれており、挙家離村による問題解決は、全てこうした状況を絶ち、生活上の便益を指向する方向に進んでいる。

4-2 文集とインタビューから
無題;「わたしは上世屋のあれこれを順序もなく、思いつくままに書くことにする、ひとは笑うかもしれないが私はそれが好きである。」(大

第 9-2 表 岩滝・加悦町転入者談

調査世帯番号	挙家離村に対する全体としての感想
1	もっと早く離村した方がよかったと思う (34才・男子・工員)
2	でてよかったと思う、残っている人に離村をすすめることのできる位 (69才・男子・農業・機業)
5	非常によかった (27才・女性・機業・自営)
6	よかった (44才・男性・事務所)
7	人がいなくなったので出るようになった。特に早く出る気持はなかった (53才・女性・子守)
8	どうせ出るならもっと早く出ていればよかった。年が若かったらいい仕事口があったのではないか (42才・男性・用務員)
11	離村してみてもよかったと思う (51才・男性・用務員)
12	今どうせ出るのだったなら、若い時に出ておけばよかった (34才・女性・機業・被用)
14	集団で出るようになったので出るのが当り前のようになった。もっと早く出た方がよい (36才・男性・工員)
16	火災保険に入ってなかったので離村できた。出喜んでいる (注、昭和34年に大火事に会い火火保険をかけていなかった) (36才・女性・機業・自営)
17	早く出てよかった (37才・男性・機業・自営)
81	時勢でやむをえない (56才・男性・工員)

(注) 「限界的地帯の挙家離村をめぐる諸問題」より。

第10表 性別・生活時間 (時間)

区 分	京 都 市		宮津市・上世屋	
	男	女	男	女
睡 眠	8.29	8.01	6.86	6.75
仕 事	6.31	4.26	8.5	8.3
食 事	1.15	1.52	1.5	1.5
趣 味・娯 楽	0.3	0.16	1.12	2.15
移 動 通 勤	0.25	0.04	0.33	0.02
身の回りの用事	0.56	1.11	0.25	1.00

(注) ただし上世屋地区は55歳以上の男女31名を対象とした。

江俊実（上世屋、昭和36年離村、京都府乙訓郡長岡町在住）より引用

1) 丹後半島の屋根上世屋へ昭和27年丹海バス開通の思い出より

バス開通までモモヒキにわらじ姿の男性、3市前かけにキハンわらじ姿の女性が上世屋から日置まで6キロを徒歩で1時間半、そこから宮津まで船で45分かけて歩いたと、今日の若者には分かってもらえないような話し、だから大江氏は書き残すのだと。

2) 松尾の分かれ道からみる松尾

日置から世屋山つたいにつまきで登り細長い下世屋の一番上から2つに、いち は 分かれる。ここを右に道をのぼると松尾であるが、ここからみる正面の松尾村は10人中9人がみて関心する。

3) 急な段だんに残る草やねの松尾

世屋村でも遅く挙家離村した村、そして離村して岩滝にでた友人の「もっと早く出ればよかった。よくまあ松尾みたいなところに今まで住んでいたものだ」という意見。

4) はば3メートルの狭いたにに懸かる高さ35メートル龍溪橋

昭和3年世屋村発展のために総力をかけて懸けた橋。

5) 左甚五郎、かよいつめた龍のすむ龍ヶ壺その姿を成相寺に残した龍の彫刻。

6) 世屋谷川橋の付近に没したキツネに化かされた久エ門じいさんと記憶にのこる故人たち自転車に乗ったまま谷底に突っ込んだM.薫さん、昭和9年台風川にのまれ福井まで流されたH.ユミさん、酒をのみ川にのみこまれたY.房治さん。

7) だれ1人花をたむける者のない1人地藏さん

狭い悪路を地藏さんに守ってもらって荷板に炭や荷物を背負って日置まで運んだ婦人たち、手を合わせていた婦人たちもいつしか忘れさられ残念に思う、思い出の日々。

8) 雨乞い、日和乞い、武運長久を祈った世屋姫神社

毎週日曜日に境内を掃ききよめた子供頃の思い出、今はこどもも青年もいなくなり祭りをもち

あげてくれる者がいない、ただ昔話として残そうとする年寄りたち。

9) 村の人口300人；農協出張所開設、バス開通、電話敷設

10) コミュニティーセンターとしての小・中学校

村の住人の99パーセントはこの学校で育った。度重なる増築と教員の増加、一時100名近くの生徒が学んだ学校で思い出も多い。その他学校は地域のセンターとして婦人会の会合・農談会はもとより演芸会、その他放課後から夜は公民館として多目的に使用され46中だれか人が集まっていた。それが今ではここに集まる人々がいない、まことに寂しい感想をもらす。

11) 慈眼寺の境内で踊った盆踊り

村として相当無理をして建てた寺、ここには若者が大勢あつまってきた。15年前までは十七夜、盆、など盛大な盆踊りがくりひろげられ朝東が白むまで若者たちが踊りつづけた。思うに盆踊りというときばってくれたじいさんたちがいたM.和エ門、O.市郎兵衛。踊りも上手だがとくに音頭とりが道にうまい。験の奥に焼き付いている。

12) 大4手(おおして)の最後

古老の12番目の思い出は上世屋と銚子の滝にいたる途中に大4手という聖観音の生んだ大樹が1本あった。「そうだなあ、木のまわりは2丈ではきかんだろうなあ」「高さ、さあ見当がつかん100尺もあつたろうか」木の周囲約2メートル、高さ30メートルの樹令1,300年といわれていた巨木であった。人々はこれを観音さまが生んだ神木としてあがめ信仰の対象でもあった。ところが残念なことに昭和38年9月21日室戸台風により倒れてしまった。」大暴風襲来、死亡者3名(畑1、東の1、木子1)ヲ出シ田畑橋流出道路及ビ護岸決壊ハナハダシイ」と世屋村年表に記録されているがこのとき尊い人命と共に大4手も倒れたのではないかという。

今はあとかたもない、村人に記憶のなかには木子駒倉の府道ができるころまでは大4手の切り跡も寺屋敷からはっきりしていた。台風に倒れてから37年大4手2世が宮津同郷会の人々が記念してもうすこし上に植樹された。

13) 現在その大4手の大樹が2股になっているところにて7かまどが寄生している。

14) 観音堂と1寸8分の金の仏像

慈眼寺から西北へ約2丁いったところに観音堂がある。別名成相山の奥院ともいわれた霊現あらたなる観音さまがおられたという。そこでこれに関する観音縁起書をもとに話しをかきとめておきたい。そもそも慶雲元年(704)年ごろの話である。若狭湾に漁する舟人たちが日置の奥深い高山に毎夜怪火がともし不思議だとして語り伝えられていた。或る日諸国を行脚する雲水僧がこれを聞き日置に上陸し川をつたって登った。彼こそ真応上人その人である。ついに同年9月11日夢の中で山中に1人の神僧にであい。「これから深山に入り仏道に精進し決しておこたってはならない」といわれ姿を消された。早速旅支度を整え山の奥へと入ったが迷うこと6日疲労のため倒れ人事不省に陥った。目のまえに1匹の凍死した鹿があらわれ上人はひもじさのため鹿の腿肉をそいで食べ活力を得た。そこで斎戒もく浴して道場に入ったが鹿がいない。堂内の尊像を見ると尊像のふながれとももの肉がそがれさながら生身のごとく血が出ていたという。さては観音さまが鹿にかわって我が身を救いくださったのかと、食べ残りの肉を尊像の傷の跡にあわせると不思議きずあとは跡形もなく直ったという。残った肉が尊像のふともものに成りあった、すなわち成り相うた、というところからこれを「成相観音」と命名されたという。

こうした観音への信仰は益々高まっていった。ただ残念ながら1尺8寸の金の仏像はいまはない。これは慈眼寺の寺宝に「狭屋山縁起」と「金の仏像」として、物語だけが残っている。明治30年ころ当時寺に愛称「ミイ」という放蕩息子がいた。小僧を勤めていたが寺を飛びだしてしまった。その後観音像が無くなっていることにきずき「ミイ」の仕業ではないかと思ったが本人がいない。後に「ミイ」が寺に戻った時(昭和37年ころ)、村の3役に呼び出され問い詰められる。すると悪気もなくその事実を認め「ああそうそう忘れとった、いたずらに持ち出し庵山にうめた」という。早速庵山を掘ったが出てこ

なかった。

15) 銚子の滝

観音さんより奥に見事な滝がある。高さ5丈8尺、滝の左右3,40間、滝の口銚子の如し、から名付けられたという。

16) お不動さん

本堂へお参りしてもこの不動さんへ参拝しないと利益がないと言いつたえられていた。こんなことを書いていると1木1草1石にいたるまで記憶がなつかしくおもいだされて来るが、到底書き尽くすことはできないのが残念。

17) 舞台のドンドン

上世屋村の奥に舞台の「ドンドン」という川巾が大きい水の豊かな広がりをもつ子供の水泳場があり格好の遊び場であった。水泳パンツをつけない子、下着をつけて泳ぐ子供たち、幼いこどもたちは芋の子を洗うように遊び興じた。その子供たちの有様は忘ることができないと老人たちは語る。

そして上世屋の人々はともに信じ、愛し、助け合って村を作ってきたと目をうるませる。しかし終戦を境に時代と人々の気持ちが大きく変わった。

18) 昭和19年の大火と終戦

9月2日午後2時ころ火元(第4図—36番の家)より出火、小学校と民家1戸をのこして全焼、生後数ヶ月の嬰兒(O.美子)と60余才のM.三吉じいさん焼死、牛5頭焼死した。復興のめどがつかぬまま終戦を迎えた。村の事業は多くしかもお互い貧しかった。大きな家を建てたもの、まだ家の建たないもの、一はやく家を建てたものはヤミ米1俵で家が建ったが、その後の物価の値上げ、大工の日当日増しに上昇、遅く家を建てたものは米30俵をつんでも出来なかった。

19) どんどん上がる物価賃金と復興米の制度
金や米がなくても家は建てねばならない。むらの役員が集まり相談の結果復興米の制度一種の頼母子講を起こし、大勢のものがこの制度によって復興ができた。

20) 村を去った第1号 O.俊実氏(昭和36年7月)

ここを去った者たちの言い分その1;—ここにおいては社会の恩恵を受けられないばかりか損

である。当時最大の事業は道路工事であった。いついつは何番組から何人あたりといて夫の割り当てがあり、1戸あたり10日あるいは15日無料奉仕が義務付けられた。2人の家でも8人家族であろうと、固定資産や収入の大小に係わりなく強いられてきた。この古老は「こんなばかな話はない」いきどおりをかくせない。そのはず、当時人口の割にまた金が無いにもかかわらず村仕事が多かった、中学校の建設、寺の復興、観音堂の大修理、教員住宅の建設、ダケ道、ショープ道、奥地道、ジャワミ道などなど計画された道路建設が山積していた。なかでも区長や役員となると年間何10日から150日も無料奉仕が強いられたことが重荷となっていたこと。その2、こどもの教育、昭和36年ころ1万円だして子を高校へ出せる家庭は1,2くらいでおおかたは学力があっても義務教育でおわりであった。教育は機会均等が原則だ差別をうけてはならないと、これは我慢してはならないものである。同時に何処に住もうがそれは自由である。しかしだれも故郷を忘れている者はないと念をおすようにうなづく。

21) 河川の砂防工事にささげたO.長治, Y.初衛, 山本事務官

記憶に残る村の功労者たち

概して古老たちの記憶の中に残る功労者たちとは下世屋から上世屋への府道建設にあり上世屋の良悪は道の良悪と言ってよい。これはほど上世屋の歴史は道の歴史と言って過言ではなかった。これに係わった人々も決して少なくない。とくにといって挙げてくれる功労者の中にはまさに上世屋まで道を作り良くしてくれた人々である。その1人が古い記憶の中に残る人物は小川喜兵衛爺であろう。今日人々が尋ねてくれて言うことには「上世屋が世屋村のなかで一番美しいところ」だと評してくれるし、「よくもこんなに上世屋川がきれいになったものだ」と感心されるが。これはみな道を作ってくれた爺のおかげだと村人は言い、誇りにしている。

ところで川がきれいになったというのがこれは河川の砂防工事にある。貧しい村人が一丸となって資金と労力を提供して工事を着工し完成させた誇りが村人の中にはある。なかでも小川長

治氏の名前が第1にあがる。区長を勤めたことのある人物であるが評して「先のみえる人物」と評する。というのも上世屋を国で指定する砂防地区にいれてもらうために奔走し時の衆議院議員芦田均代議士の協力を取り付けたのも彼であったという。府庁の役人も是れは難問だといって首を横にふったその一件を見事国の指定を受けて第1期工事を着工させた。吉岡初衛氏(当時区長兼工事監督)現場監督としての手腕抜群であるばかりでなく宮津工管所と良く連絡をとり工事は以外と良く進み上世屋の区民も人夫として良く働いた。工事は一端終戦で中断したが戦後再び世相の落ち着きとともに再び村を流れる3本の川を「きれいに流れる川」に整備した。小川長治氏が芦田代議士に指導をうけて20年かけて完成させたものである。この川はそうした村人の汗の結晶だといってよい。

そうした先人たちの苦勞して作ってくれた上世屋を若者がこぞって出るのは申し訳ない。大江俊実氏は当時を回顧して子たちの大きくなる時、上世屋に踏みとどまって10年、15年村の改革に役立つか、それとも村を離れて気楽に生活だけを考えたらいいか2つに1つと境界人としての悩み苦しみを味わったという。ついに村をであることを決心したのだという。その後10年、木子、駒倉、上世屋と離村者が続出したのだが大なり小なり自分と同じ考えの者が多かったものと推察する。自分はこれで良かったのだと思う、と。

22) 甘藷栽培と失敗

Y.初衛が農協組合長当時村起こしの一貫として高地(400メートル以上の高地でないと栽培できなかった)に適した甘藷づくりに活路を見いだそうとした。京都府では400メートル以上の高地は数か所でその1つが上世屋、木子、駒倉で、当時京都の中央市場も世屋の高原甘藷を喜んでくれた。1反あたり8万円の収入が見込まれたが当時8万円は上世屋の普通世帯の8ヶ月分の収入に等しかった。村は甘藷作り一色に染まった。然しまもなく夏だし甘藷は海拔400メートルを要しなかった。これに押され遂に甘藷作りが失敗におわってしまった苦い経験をもっている。なぜ良と判断した甘藷づくりが計画

3年で失敗におわったのだろうか？　せめても市や農協団体の役員がなぜ言ってくれなかったのだろうか。ここに市や行政に対する不信が村人に恨みとしてもっている。

23) 昭和36年7月 O. 俊実氏 離村第1号と村の様子

かれが決意したのは昭和36年、当時村は道作り、甘藷栽培、奥地道の設計の真っ最中だった。田畑山林の売却を公示した。ところが「上世屋で暮らせない者がどうして他で仕事出来るか」とか、「悪口をいう者は早く出ていけっ」だとか、よそにいったら10円だってかしてはくれぬわい」とか、しまいには「貧乏人は出ていけ」など言われ辛い思いをしたと当時を思い出すことがあるという。

24) 小川保男氏のこと

大江氏は、上世屋最大の人物に小川喜衛爺の息子で大学を出、裁判官として定年後は農林署、のちに北海道林野庁長官を勤めた小川保男氏をあげる。とくに子供のころは天皇陛下の次に偉い人だと思っていたが、上世屋の火災のとき大量の米、みそ、など回してくれた人で村のことを心配してくれた偉い人だという。そうして自分は村を離れた人間であるが何らかの方法で村の為に成りたいと思うことがしばしばあるという。以上、村を立ち去った者たちのつづる「文集」の中に、村人の意識の一面をのぞかせている。

5. 「丹後地域開発計画」と住民意識の葛藤

1) 開発計画にたいする住民の意識

計画は当初世屋住民の過疎化や高齢化に危機を感じ住民相互の理解と協力によってこの現状を打開しようとして起こした運動である。しかし計画が進むにつれて当初抱いていた期待が次第にうすれ一部の者を除いて無関心になりつつある。

先ず、今回の世屋における調査の中にこれに関する項目を入れてみた。その1つ地元への「体験実習センターの建設について」4つの選択技より選んでもらったが9割りもの住民は「別につくらんでもええのになあ」と半ば否定的な答えがかえってきた。むしろ「良い計画だっ

た」と肯定する住民は皆無である。つづいてその計画への過程で十分住民参加があり討論されたが、一旦動きはじめると一部の役員だけで住民にはなにも知らされずに計画がすすめられたといういきさつがあって住民の支持を得ていないと見るべきであろう。「計画の進め方について」住民の意志が取り入れられなかったとする意見が8ないし9割りもある。残りは「分からない」とする者である。むしろ府や市で進めている観光・レクリエーションとして世屋を開発して村起こしに役立てようとする「計画の世屋地区への将来性」では7割りの者は期待していないと答えている。わずかに1割りで、むしろ今になってみると工場を誘致して若者をいるべきだったとか、開発をしなかった方がいいとする者までが出てきているのが実状である。おそらくこれは計画が長期に渡るため即効的な効果を期待できなかったためと察する。「計画ができる(完成する)までわしら生ておらんと」に代表されるように、住民の期待していた計画は目の前にひかえた自分たちの老後と村の発展にはつながらない、むしろ上の開発のため工事用のトラックが集落をいききするため老人や生活者のにとっては危険だし、土砂をまきちらされるのでは「かなわん」また「損だ」とはっきり被害意識を持っている者が少くない。さらに上の旅行村やロッジ、体験実習館に勤めに出よう進められるが、村民の何がしかの収入になる就労の機会も時給500円(昭和61年)では「高いバス代をはらってそんな所まで」「いやな思いをして勤めんでもええ」、したがって地元の蕎麦打ち体験実習館も藤布実習館への期待も大きいがその特産を生かしたそば打ちの実習館も結局開店休業で住民の労働力の需要をまかなうまでに至っていない。あくまでも臨時のアルバイトだし、そのためか忙しい時の当番制なども不満をつのるばかりで、むしろ逆効果である。また、若者を集め集約農業をすすめている国土開発の圃場整備も一向に若者の定着がすすんでおらず焦りさえ感じている。むしろその管理のために無報酬で草刈りなど総仕事に狩りだされるなど住民への負担はおおきく不満はつものるばかり。ある古老の残した言葉が印象的だったが「結局役人さ

んにだまされたのと違うか」そして「かれらはむしろ上世屋が消滅するのを待ってるんだよね」と結んだことがいまにこころに残っている。

2) 住民の葛藤

この事業計画は先にのべたように委託という形ですめられてきたが、県と市、と各自治会の相互の意識のズレが生じてきている。さしずめ市（行政）と実際の運営を担当している「世屋の里協会」、さらには住民との間の意志の疎通と葛藤が生じてきている。まず第1の行政と「世屋の里協会」の間には前者の長期的展望にもとづいた計画実施（2,500万円をかける本格的なテニスコート建設を主張するのに）対して「世屋の里協会」では整地をして金網を張った程度のもので良いとする。こうしたズレはもともと「世屋の里協会」は独自に市を越えて府と故前尾繁三郎代議士と折衝されていたがその道が絶れてしまったいきさつがあり、相互間に気まずさが生じてしまったらしい。一方「世屋の里協会」もそのメンバーが地元出身者ばかりで指導性にとむノーハウを知っている者が少ない、協会自体のまとまりのなさ、などなどスムーズな運営を妨げている。要因となっている。また住民と密着しているはずの協会もいつしかひとり歩きしてしまって地域住民にその意見が十分浸透していないこのために生じる葛藤もある。現在この3者の関係は相互関係がうまくいかず三すくみの状態にあるだけにその間の葛藤も大きく住民の参加意欲を欠くファクターになっている。

とくに注目しておきたい意識のズレは上世屋の住民のいだいているもので問題は開発の即効的な効果がないとするいわば表面的なものだけではなく、開発計画以前に逆のぼるいわく因念の深いミゾである。その1つは現在松尾に地設されている旅行村であるがこれはかつて上世屋に候補地があがっていた。ところが三方山で囲まれており火災の心配や景観の点で松尾に移されたいきさつがあり、これが未だに尾を引いている。上世屋の住人にとっては期待していた矢先に建設地が松尾に移ったため肩すかしをくったと思込んでいるのではないかと松尾の区長は言う。こうした部落間の葛藤は昨日今日始まっ

たことではない。かつて山林をめぐる入り会権をめぐる争われてきたいきさつもあってミゾはかなり深いものと察するべきであろう。

6. ケース・スタデー

それでは次に調査に参加した学生らのインタビューより2、3全体を代表するようなケースについて記述しておきたい。

イ) O. 藤吉さんの場合

藤吉さんは、今年86歳、小川家の三男として明治34年に生まれた。兄弟は幼い頃に亡くし、妻とは20年前、(66歳で死亡)死に分かれた。長男は、戦争中は航空兵として出征し、現在は上世屋で約30頭の牛を飼っている。次男は戦死。勲章をもらう程の手柄をたてた。村の墓地に立派なお墓をたてて、まつっている。他に娘が2人。長女は既に亡く、次女は日置に嫁入りして、時々顔をのぞきに来る。

現在の上世屋の体験実習センターの敷地は、藤吉さんの土地を売却したものである。そうとうの資産家のようなものである。総じてそうした話や立派なお墓の話、長い間役員を務めた話等から、世屋村ではかなり名の通った、いわゆる実力者ひとりだった。

既に隠居生活に入り仕事からは離れているが、牛については詳しい。例えば30頭という責任頭数を飼えば、補助金が支払われるとか、品評会に出すための牛が数頭いるので一件につき2,000万の補助が出る事等、なかなか86歳とは思えないほどのしっかり者で現役らしくはきりした口調で話してくれた。

第一回の調査を行った昨年11月には、風邪で寝込んでいたため、全く会うことができ第二回目の今年5月に会った時はその時の事を細かく話してくれた。昨年10月の末(24日と言ったように思うが定かではない)朝10時半頃、家の裏のポンプのそうじをしていた時、ひと休みのつもりで腰をおろしたとたん、そのまま起き上がれなくなってしまい、そこから家の2階までひとりではって帰ったという。しかもそれに要した時間はざっと4、5時間あるが、その間誰とも出会うことがなかったという。丸3日間、食事もとらずに寝込、4日目にようやく日置の次

女が、何度電話をかけても出ない。おかしいとようやく気づき、隣棟に住んでいる長男一家に連絡がとれ、それに気づき、わてて病院に運んだという。結果風邪ということだったが、冬の間はほとんど寝て過ごしたという。この話を何度も何度も、時には、身振り手振りを加えながら話してくれた。話しが牛の事や、孫の嫁のこと、戦友会（郷友会）の事などいろいろ変わっていても、いつのまにか病気の話に戻ってしまう。「体が不自由になった時、主にどなたに世話をしてもらいたいと思いますか」というの質問に対して「病院の人」と答えている。藤吉さんの話では、近くに住む長男一家に強を信頼しているにもかかわらず、答えは「病院の人」なのである。その理由は、「血のつながった者はいるけれど、病気や体の事は医者や看護婦の方がよくわかってもらえるから」。と外で倒れ、一日かけて家まで帰っても誰にも気付かれない。その上近くに家族がいても3日間も発見されない。もう少しでも人の往来のある所なら家にはって帰る途中で誰かに出会っているはず。仮りに出会ってさえいれば3日間も飲まず食わずで放っておかれるようなこともなかったであろう。

7月の第三回調査時には、お孫さんに嫁とりがあった後で「待っていたお嫁さんが来てね」と藤吉さんの喜びもかなりのようだった。5月には、病気が戦争中の話を選んでいた藤吉さんだったが、夏には、それらにはこちらからたずねなければ答えず、お嫁さんの話に終始した。

新しい若い人の加入が、ひとりの老人の長い過去を超越するのである。公民館にいる赤ちゃんの成長を楽しみにしている人達も多くいる。若い存在、若い力が、上世屋、そして世屋地区全体をカバーする力になり、丹後半島の過疎化の進むそれぞれの地域にも同じような力が入るような、又はそうなるための、丹後半島再開発計画であってほしいと望んでいる。

しかし、その反面田んぼの世話は最後に残った老人の仕事となっている。このように家族全員が手一杯の仕事を受け持っているのである。つけくわえて言えば、手織りは1人で織れるといった利点がある。田畑のように多数の人数を

要しないで収入が得られて尚かつ仮に、仕事ができることなく、自分の時間や都合に合わせて仕事ができるといったメリットがある。なによりも家の中で仕事ができるようになること、村の人たちを他へ流出することがなくなった大きな原因ともなっている。ところで最近村の中で仕事に関するとりきめが出来たので紹介しておく。このように村の人たちは「働きもん」と呼ばれている通り、働き者が多いしため、休むということをあまりしないそこで村休みとして第1・3日曜日は、すべての家が1日中何もしないという曜日をもうけた程である。休みの日には村の宮に参ったりする。このようにして休日を設定しなければ、休むということをしないう上世屋の人たちを学生たちは「機械に使われた人間ロボット、だと感想をもらしている。以上村の婦人たちは家事、畑仕事、識りなど労働時間に費やす時間の長いのが特徴である。

その他趣味・娯楽の時間にも変化や違いがみられると思いますが、その原因として考えられることは、都会や町の人たちは、どうしても時間というものに追われがちになって仕事のほかに何かをやる時間がなくなってしまうのではなくて、作ることができなくなってしまう所に問題あると思う。その点、上世屋の人たちは、時間というものに追われることがなく、各個人個人が時間をうまく利用できる点で、このようなちがいを生むのではないかと考えられる。このようなことを言えるのも上世屋村を取り囲むほどのかな自然があるからであると思うし、さらに自然というものは人間をおおらかな気分へと誘いまた未知の力を引き出してくれそうな雰囲気を持たせものであると思う。だから私は、時間的にも自然に余裕ができてくるし、人間を取り囲む環境にも大きな原因があると思えてならない。以上のようなことが表を通して気がついた然でありました。

次いでに私はこのように60才を過ぎた人たちが1日9時間近く働けるだけの健康管理をどのようにしているのか質問してみると、大半の答えとして、自分はここで暮らしている以上は息子たちには世話になりたくなく、自分の身体が動かなくなるまで働いていたい。要するにこれ

はただ自分の中にある精神的な面が左右する点であり、もう1つはこれは、具体的でわかりやすいのですが、月に一度の健康診断、これは、宮津市が行っているものと、年に3回の医者が村を訪れて行われる健康診断の2通りの健康診断を、村の人たちは必ずといっていいぐらいに、受けている。この数回の診断で健康を保っているのに対して市や町の老人たちの姿は、毎日毎日病院を老人たちの集会所のようにして集まり、薬づけされている老人たちと、比較にみると、町や市の老人たちは「健康を維持されている、ようで、上世屋の老人たちは、健康を自分で維持をしているように思えてならない。概して上世屋の老人たちは、市や町の老人たちに比べると実に生き生きとした姿がうかがえるそんな感想を持ちえた。

ここでは次ぎに上世屋の冬の生活について述べておく。冬を迎えるにあたり、各家々では「冬がこい、をし」と称して田畑の野菜物を全部家の中に取り込んだり、田畑をほりおこしておく。世屋地区の概要で紹介したように2メートルから3メートルに達し、およそ家が雪にうまる程である。だから冬場の仕事として営林署勤めの男性は、冬場は積雪のため仕事ができなくなるので家で雪よけをしたりしいたけに菌を入れたりして暮らしている。

そして3月頃に雪がきえると田畑をおこし4月から営林署勤めを始める。他方女性の手織りは積雪に関係なく家の中での仕事であるので支障は全くない。あるとしたらでき上がった帯の運送ぐらいである。外部の我々は上世屋にきびしい冬場がないととても快適な所であるのと思えてならない。尚生活にとって最も不可欠である食料品の調達であるが、この10年ぐらい下の日置から車で生活必需品が販売にくる。その曜日が決まっていて、火曜日・木曜日・土曜日の週3回上世屋に販売にくることになっている。今では、日置から上世屋までの道はアスファルトで整備されていて、車で上がってくることが容易でなくなってきたが、冬場は、市のブルトナーが雪かきをしてくれるおかげで冬場でも生活必需品に困ることがない。バスも1日2回運行していて（昭和29年から運行）以上数年間の

間で上世屋の人たちの生活が変化したように思われる。言葉を変えて言うならば社会が豊かになったからだとも言えるのではないか、むしろその波にうまくのり合わせたのが上世屋の村にとどまった人たちではないかと思う。しかし、現在この地区の人たちは町や市と生活が変わらなくなった今日では、自分の働ける内は働いて金をため、体の自由がきかなくなるまでは息子さんや娘さんたちとは同居しようとは考えていない。「ひと昔前ならすぐにでも子供たちといっしょに暮らしていただろ」とあるおばあさんが言っておられた。これは、上世屋の人たちすべてに共通している意識である。私は何か上世屋の村の人たちはそれぞれ個々の家に住んでいるが1つの家族的な雰囲気やうかがうことができる村であるなあと感じます。ここで私は、やはり社会の発達、しいていえば、日本の政治経済の発達により豊かになったそのたまものではないかと思うし、このことが上世屋の人たちの意識や生活が変わっていった大きな原因であろうと思う。具体的に言うと車が各戸の家に1台は必ずあるようになった事その行動範囲が広がった事。車の走る道もじゃり道からアスファルト道に整備された事等等、やはり社会の発達がどうしても重要な点として浮き上がってくるように思う。しかしこの出来事を、我々自身をとり囲む社会に目を向けると、さまざまな社会とのギャップの中に閉じ込められて解決のしようのない問題をいくつもかかえてみ、そして苦しみそのためによく自殺に追い込まれることが少なくない。むしろこのようなどろどろした社会の中で暮らしている老人たちには社会の発達をかりに数字で満点10で表すと、老人たちは半分の5ぐらいの満点度しかないと思う。現に市や町の老人たちは自分の意志で動くことを忘れてしまい家族の者にあやつられるだけのロボット化されてしまっていて、尚その生活自体も他人のいいなりにされてしまっているように思えてならない。

このように考えると、何か上世屋村の人たちがうらやましくさえ思えてならない。自分のやりたいことを時間に追われることなくゆったりとした生活を送っているのを思うと理想的な老

人の生活のように思えてくる。まさに生き生きとしたものが感じられるし、そこでは、物事を純粋な立場でとらえられるものだとも思う。要するに、私は、あまりにも豊かになりすぎた現代社会なのですが、これは、ある意味ではすばらしい出来事であっても、他方で見るとそれが何か当然なことのよう思われてしまって本当の豊かさを感じとれないでしまっているのではないだろうかと思えてならない。大げさな言い方になるかもしれませんが、さの社会の発達に感謝しているのは、上世屋の住民の人たちではないだろうかと思いたくなる。ます。

(文責・青木美晴)

ロ) ケーススタデー(2)

M. よしさんの場合

この村には伝統の藤布という織物があることは行く前から知っていたのだが、それは、たった一人のお婆さんが織っているだけで、ここでの機織りとは西陣織なのである。こんな山の中で京都の西陣と全く同じものを織っているというのは思いも寄らぬことであった。私は最初、伝統の藤布をみんなで保護しているのだと思っていた。藤布というのは山に生育する藤のつるから繊維を取り出しその糸で織る丈夫な布で昔から袋とか衣類(農作業にちょうど良い)に用いられていたものであるが、山から取ってきて糸にするまでの作業が大変で危険でさえある。一反織り上げるまでの時間や手間も相当なものらしい。今ではとても価値があり、業者からの依頼も多く高く買い取っていく。誰も織る人がいないという事がその価値を上げているとも考えられるが……。そのお婆さんは自分の織ったものがそれだけ世間に認められるという誇りに満ち充実しているだろう。すばらしい生きがいだと思う。ではなぜ他の婦人たちはすばらしい藤布を織らないのだろう。技術が難しいのだろうか。

地元の人達にとって藤布というのは案外価値が低い。たとえ一反の値が高くても、その一反を織るために費やす時間がとても多くてその期間何も収入がない。織るのはとても簡単なのであるが、糸にするまでの手間が大変で、多くのつるからほんの少ししか糸にならない。ある婦

人は、『あまりきれいな物でもないし、どこが値打ちがあるのかわからない』と言っていた。そして又『もっと年をとって西陣織の細かい作業ができなくなったら、藤布でも織るけれど』とも、藤布は老人の仕事なのだそうだ。

ハ) ケーススタデー(3)

O. きよ子さんの場合

この村の多くの婦人たちは、西陣織を仕事としている。雪に閉ざされた冬も家の中でずっと仕事を続ける事ができる。農業の合い間にもいつでもできる。又ひとり暮らしの婦人にとっては、機織りだけが唯一の仕事となっている。

私が訪ねた婦人はひとり暮らしで、朝から晩までずっと機織りをしていた。この寂しい山の中で生きていけるのは機織りがあるからこそである。西陣織の技術を習得するのは決して容易な事ではなかっただろうと思われる。

西陣織をする前は農業をやっていたが、農業を1人で続ける事はできないし体も楽ではない。収入も一定ではない。西陣織はいつでも家の中でできるしやればやるだけの収入がある。まさに天の恵みではないだろうか、西陣の会社からみんなを集めて指導してくれるという集会に参加して習った。細かい手作業で慣れるまでにずいぶん時間がかかる。でも『今、やっておかなければ』と必死に取り組み途中で投げ出さずにできた。この婦人はまだ年金のもらえる年でもないし全くこの西陣織だけの収入で生活している。忙しい時は昼食も忘れる程一日中仕事をしている。この人にとって、いや上世屋の人達にとって仕事することは日常生活のすべてであり、それは苦しくても楽しみになるのである。働かなければ生きていけないのは当然である。それは西陣織であるからなおできると言えるだろう。もし西陣織がなかったらこの婦人のようなひとり暮らしの人はとてもこの村では生きられないだろう。きついやでも子どもの世話になるしかない。又ひとり暮らしでなく、農業をしても、長い冬の間のことを考えると西陣織の大切さがわかる。西陣織のない生活なんて考えられないのである。

上世屋の婦人にとって西陣織は仕事であり、趣味・楽しみであり生きがいなのである。これ

は、まるでサラリーマンが、仕事命、会社命で仕事をするのと同じである。余暇自由時間などという時間はほとんどないと言ってよい。他に何も楽しみなんてないのである。とにかく働き者で、無駄な事はしない。もしかしたら少し自己中心的なのかもしれない。

たとえば、上世屋の中で行われている過疎対策の事業（体験実習館や体験教室）に参加するどころか、何も関心を持っていない。なぜかと聞くと『自分の仕事が忙しいから、何も役に立ってない』という答えが返ってきた。つまりそんな暇があったら1本でも多く帯を織りたいという事なのである。私は異常な程の労働意欲に驚かされた。

改めてここで1日の生活時間を考えると上世屋の婦人は、一次活動と二次活動の二分される、と言えるだろう。

このような働き者の婦人方の唯一の息抜きは、毎週一度、織り上がった帯を集めて出荷するためにみんなで集まって話をする事である。そこではまさに井戸端会議が行われ、途切れることなく話が続いていく、この様な交流も西陣織があってこそできるのかも知れない。

それにしても女性というものがどれだけ力強く生きられるものかと考える。現在のところ平均寿命を見ても明らかであるが、男の人は生きる事が難しいのだろうか、この村に於いても、女性は西陣織という立派な職業につき、もっと年をとってできなくなったら藤布という伝統産業が待っている。死ぬまでずっと確かな手ごたえがあるといえるだろう。

ところが男性は、というと営林署は定年がある。それを過ぎると農業があるが、これは低位生産性だし発展は見られないだろう。又重労働でもある。又、多くの場合男性は家事一斉を人に頼らなければならないだろう。この村でも人口の比は男性より女性の方が高い。

西陣織がたとえ長時間労働で疲れやすくなっても生活にハリを持たせるという事は心身共に健康を保つことができるのではないかと思う。そのために老人性痴呆症の防止にもなるし、なにより医療設備の整っていないこの村には良い結果をもたらしているのかも知れない。

上世屋に西陣織を伝えたのは、京都市内の私達の大学の近くにある某会社であるどうしてあのような山奥の地域をわざわざ選んだのかということに疑問を持ったそして安い賃金で働いてもらえるからではないだろうかとまず考え、いつ頃どのように接触したのか等も知りたくなり、直接聞きに行くことにした。

どうして上世屋を選んだのかと尋ねると、会社の知り合いが上世屋の誰かと知り合いだったとかで、雪の続く長い冬に出来る仕事を上世屋の人達がさがしているという情報が入ってきたらしい。そして、そこの人達がどれだけ真面目で働き者であるかを知った。又、これより他に何も仕事がないだろうということも知ったのである。こういう条件がうまく融合して現在の関係を持つことが出来たのだそうだ。

まず昭和46年の6月15日頃、一ヶ月程公民館（共同作業場）で講習を開き、機は各家に無料で渡して指導した。工場を作るという計画もあったようだが、設備はいるし、維持・管理するのは大変だし、農業もしているから生産も一定しないという理由でやめたそうだ。上世屋では、綴機を使って一年中同じ種類の帯を同じ手法で織ってもらっている。それは、単純な模様で流行のない夏用の袋帯やなごや帯である。時には新しい図柄の指導に行くこともあるが少し遠すぎるし、その帯をずっと変わらず織り続けてもらうという事が大切なのだそうだ。伝統を守り続けるという事なのであろう。だから、その意味でも今後いつまでも続けてもらうつもりでいる。

会社側は、婦人達に技術を身につけさせてあげだし、賃金は全て出来高制で男女差もなく働ける限り働くことが出来るという仕事を与えてあげた。最初に考えていたとおり、確かに賃金も安いようだが、物価が違うし、婦人達の都合で好きな時に仕事をしてもらっている。時には、生産量の問題や失敗品などもあって辛抱することもあるそうだが過疎化の防止にもなっていると思っておられる。そして婦人達は、西陣織の技術が身につけられたことをとても感謝しておられる。

だから、会社側としては、上世屋の婦人達と

はただの利潤関係だけではなく、それよりも信頼関係によって結ばれているのだということを強く強調されていた。つまり村の人達の生活の支えであり、どれだけの意味を持っているのか、という事を理解したうえでの信頼関係であり、一方的に切ったり結んだり出来るものではないのである。だから、たとえ少々の損をすることになったとしても、それは許容することが出来ると言われた。最後にいつまでも元気で仕事に打ち込んでもらえれば、会社としてもとても喜ばしい、という言葉がとても嬉しかった。

○西陣織の意義

次に、西陣織が取り入れられた時の婦人達の様子、その後の生活様式の変化、現在の気持ちなどについて述べることにする。

まず、6月に習い始め、3ヶ月程でひととおりのことが出来るようになったらしい。技術が身につくし、お金が手に入るということで最初は多くの人が習ったが、根気もいるし性に合わないという人はやめていき、今では8人になっている。西陣織をしていて岩滝の方へ行ってしまった人もいるそうだが、町へ出てしまうと一日中細かい仕事をするということには嫌けがさしてくるらしい。ある独り暮らしの婦人は、帯一つにつき4、5万円くらいで約2週間かかり、月に10万円以上の収入があるので十分暮らしていくことが出来る。上世屋の水田のほとんどが湿田だし、政府の減反政策の影響もあって農業だけで暮らしていくことは難しいし、近くに工場もなく働き口もないので、西陣織の方が百姓よりずっとよい仕事だと思っておられる。夫が亡くなってもこの土地で生まれ育ったので、今さら離れて町に住むという気はなく、それも西陣織があるから独りでも暮らしていけるのだという自信があるからなのであろう。つまり、西陣織は婦人達にとって、生活していくために必要不可欠な仕事であるが、趣味でもあり生きがいでもあり、すなわちそれが生活の全てとなっていると言える。

婦人達は、週に一度の火曜日の午後4時頃から、各々の商品を持って当番の人の家に集まっている。私達もそこへ訪れてみることにした。

まず、各々の商品を部屋のまん中に広げて、

柄や出来ばえなどを話し、そして順番に帯を箱につめていった。その後私達がいるということに対してはさほど気にも止めず、次から次へと世間話に花を咲かせていった。村の中の出来事やそれぞれの家の事情まで何にも知らない事はないのではないかと思われる程であった。西陣織という共通の話題があるからこそ、このにぎやかで楽しい集まりがあるのであって、西陣織によって一つのコミュニケーションの場が出来たのだと思った。

○西陣の出機について

以上の事から会社側と婦人側からの西陣織に対する気持ちは理解出来たが、さらに詳しく西陣織について書物で調べてみることにした。

西陣の織屋の形態は、大別すれば①自己工場のみで生産している織屋、②出機（下請工場）のみで生産している織屋、③自己工場と出機を併用して生産している織屋一の3つの形に分類できる。そして現在、出機への依存が高いのだが、出機が増大した理由は何なのであろうか、①かつて京都市と近隣諸県に存在した低廉な労働力や西陣織物産地の形成の一因であったが、高度成長の過程でその確保が困難になった。（賃金の高騰など）

②丹後地区のように農業政策の転換（減反など）によって、農家の潜在的かつ低廉な労働力を賃織生産に利用することができた。

③1950年代後半から、使用原糸の転換にともなう洗染織物の大衆品化と力織機化の進展によって製織技術が単純化され移植を可能にした。

④職住混在の西陣地区内の過密化と地価の高騰は、そこにおける内機工場やその他の関連工場の拡張を不可能にした。そうして全国の機業地に出機が拡散したわけで、丹後地区が実質的生産拠点となっているのである。その理由は、昔から西陣地区には、丹後から出かせぎに來ている人達が多く、自分の知り合いに西陣織をすすめて、兼業というかたちで賃織生産に利用することが出来たからなのであろう。

1970年代後半からは、生糸の輸入一元措置による絹織物価格の高騰に加え、本格的な恐慌が深まりを見せている。そして、現在も消費需要が減退し、かつてない厳しい状況に置かれてい

る。そうなるまっ先に打撃を受けるのは、出機に従事している人達であるわけだが、上世屋の婦人達は大丈夫なのであろうかと不安になった。

ところが、上世屋は普通の出機とは違うということに気がついた。全国に出機が拡散していき、そこでは力織機による大衆品が主に生産されているが、上世屋では全て綴機を使っている。上世屋は例外なのである。どうしてなのであろうか。

まず、綴機を使った綴織りは、最も歴史のある手法で、単純な構造の織機であることから上世屋へも運ぶことが可能であったと考えられる。また力織機で能率よく織られた大衆品とは違って高級品であり、根気と熟練のいる技術であるために、厳しい環境であり他に仕事もなく働き者の多い上世屋に合っているように思われる。

考

1) 我々は京都府宮津市世屋を対象に具体的に過疎の人口減がもたらした負の問題を考えてみることにしたが、今回はデーターを十分に解析しておらず容易に結論を引き出すことをひかえたい。そこで今後の問題を整理するつもりで若干の考察を述べておくことにする。

これまで我々は過疎とその地域に住む住民の具体的な生活を重点をおき観察、アンケート調査を用いて住民に足しげく通い接触して聞き込みかつ生活のある側面を観察できた。しかも調査に際してもっとも心がけたのはいやがうえにも住民の自給自足と自立意識をかりたてているせいかつのベース（過疎＝人口減）と彼等の日常生活、仕事、家庭の管理を中心に動く生産と消費行動、文化、政治さらには社会参加、墓もり、「世屋の里協会」への協力など生活構造を理解することに努めた。さらにはこれらの生活は多分に自立意識と自給自足に強くアケセルレイトし、生活の防衛、依頼心の抑制に働いているものと察する。したがってまたそこには自然発生的に自立自助するための係わりがめばえ、いわば原始的契約ともいえる労働の交換である。金銭によらない扶助関係として近隣に定着

る。

その帯は、生産量は少ないが流行性も少ないために需要はある程度の量を維持しているため、上世屋への依存も変わらないと言える。つまり、織物業界が少々の不況に直面しても、まっ先に切り捨てられるということは、おそらくないであろうと考えられる。

このようなことから、前述した丹後における西陣織の在り方とは違って、上世屋は特別な意味を持っていると思う。会社が上世屋との関係は、利潤関係よりも信頼関係によって強く結ばれていると言っていたことが、ここに現れているのではないだろうか。このような事から私達は、上世屋での西陣織が今後もずっと続けられるであろうという状況を知って安心したのである。（文責・青井美代子・古市和世）

察

しかけている社会関係の1つである。しかもこうした労働の交換は或る仲間意識を助成し、まさに「1村1家、族として冠婚葬祭などの相互扶助のシステムが形成されみごとに機能している。

他面、あまりの自立自助の意識は時として村全体の組織性なり行動の堂準化などとの間に葛藤なり疎外状況を呈することがある、たとえば、自己の生活完結を願うあまり多忙と村の共同性（村の共同作業、総会というが、さらには世屋の里協会村おこしのため協力が強制される実習館奉仕）とが相い入れないための葛藤が指摘され、強く「金にならないただ働きのような仕事はただ忙しいだけ」とマイナスに働いている。

さらにそうした意識はかれらの価値観にもおきな影響を与えていると考えられる。総じて多くの住民より気心の知れた僅かな友人、人より物に、物より金に、金より安全（セキユリテ＝社会福祉）、現世の安全より未来の保障（心の支えとしての信仰）へと相対的な価値へとスパイラルしていることが分かる。総じて村（共同体）より個人に価値指向を求めている。

それを別な角度から、つまり文化との接触がテレビやラジオ以外のメディアとの接触が1名(70代の女性)を除いて皆無である。つまり宮津にでる交通機関が1日1往復のバスに拘束されていること。さらにはそれに要する費用(実費2,000円)などが関係しているものと思うが、文化接触の貧困がみられるし、それをつよく求めようとする意識は無い。

総じて現在村に残っている住民は住環境の好条件(日置に近い、気候の温暖、盆地)おらが村、先祖の墓もりなどにより、現在つよくここに生きることを指向している。がしかし反面、健康な不安条件も否定出来ない。そうした状況下に置かれている。

第2の考察は人口減の負であるが、一般的にはこの2期に属する人口減と宅地廃村の過程はある時期一度に急激な人口の減少を起こして挙家離村である。がしかしこの2村では前者の木子では新しい入殖者による廃村に歯止めが生じたこと。さらに後者の上世屋では急激な一定の人口の流出がおさまったが、今後はどうゆう過程を通じて完全廃村へ至るのか、それとも過疎に一定の歯止めができるのだろうかを引き続きホローする必要がある。つまり現在村に残っている住人、しかも高齢者が今後村にどう残るのか新しい課題として改めて問題にしなければならぬ研究課題となるであろう。これには3つの道が考えられる。その1つは村を降りることであり、村にとどまることを強く指向すること、もう1つはさらに住環境のよい木子へ移るかいずれかであろう。また村を降りるにしい

ても条件は単身世帯者と夫婦世帯者では様相を異にするであろう。つまり夫婦のいずれかが病などのイベントを理由にして上記の3つのケースに分類できるし、単身の場合などいくつもの組あわしが考えられる。その際、とくに問題をのこすのは上記の3つに分類出来ない場合である。たとえば村にのこる世帯の中には家族の問題(欠損家族)や家族員にある種の問題(障害者やねたきり老人、ちほう老人をかかえる家族)があるため離村できないでいる者、さらにはまたどっちつかずの状態(境界的苦痛)で苦悶している者が少くない。これらの世帯ではアンケート調査に協力してもらえなかったものと合致する。

したがって、今後これらの実状をかんがみケアをしながら調査していく必要があると考えられる。

その3は、殊上世屋に限定していえば、この地理的条件を加味した集落の立地条件は下の集落(下世屋)よりも悪く、また上の木子よりも良いという条件の元で村落生活が出来てきた。そこで容易なことではないが集落ができた段階に歴史タイムトンネルをもどしてなぜ上世屋に人々が集まるようになったかを考察する興味ある課題がある。

まったくの憶測の域をでないが、1から3までの考察を通じて、おそらく近い将来ここ上世屋が残る社会、経済的資源に欠くため完全廃村の過程を通じて衰退の方向にいくのではないかと考えられる。これについても今後研究を続けていく必要を感じる。

論文1. 坂口慶治「丹後半島における廃村現象の地理学的考察」